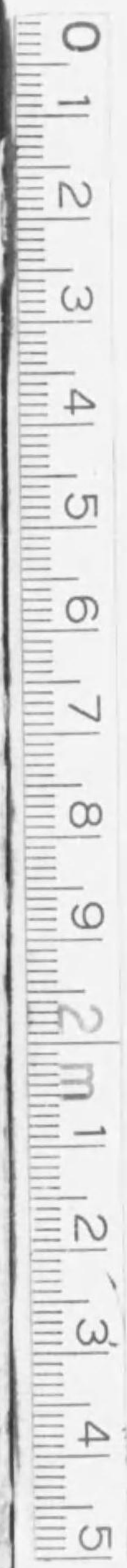




特 253
466

伊東町交通史物語

38
36



始



特253
466



伊東町
交通史物語

伊東線全通記念式委員部編



京都府京都市中區錦山町三丁目



京都府京都市中區錦山町三丁目



内山常三氏

上田莊太郎氏 小橋一太氏

鳴戸龜吉氏

久留義郷氏

山田源治氏

那司豊太郎氏

床次竹二郎氏

湯地幸平氏

鳥田重五郎氏

飯島國右衛門氏

伊東祐弘子

榑田清兵衛氏

大塚唯男氏

伊藏大入氏

中村彌五四郎氏

野田卯太郎氏

太田賢治郎氏

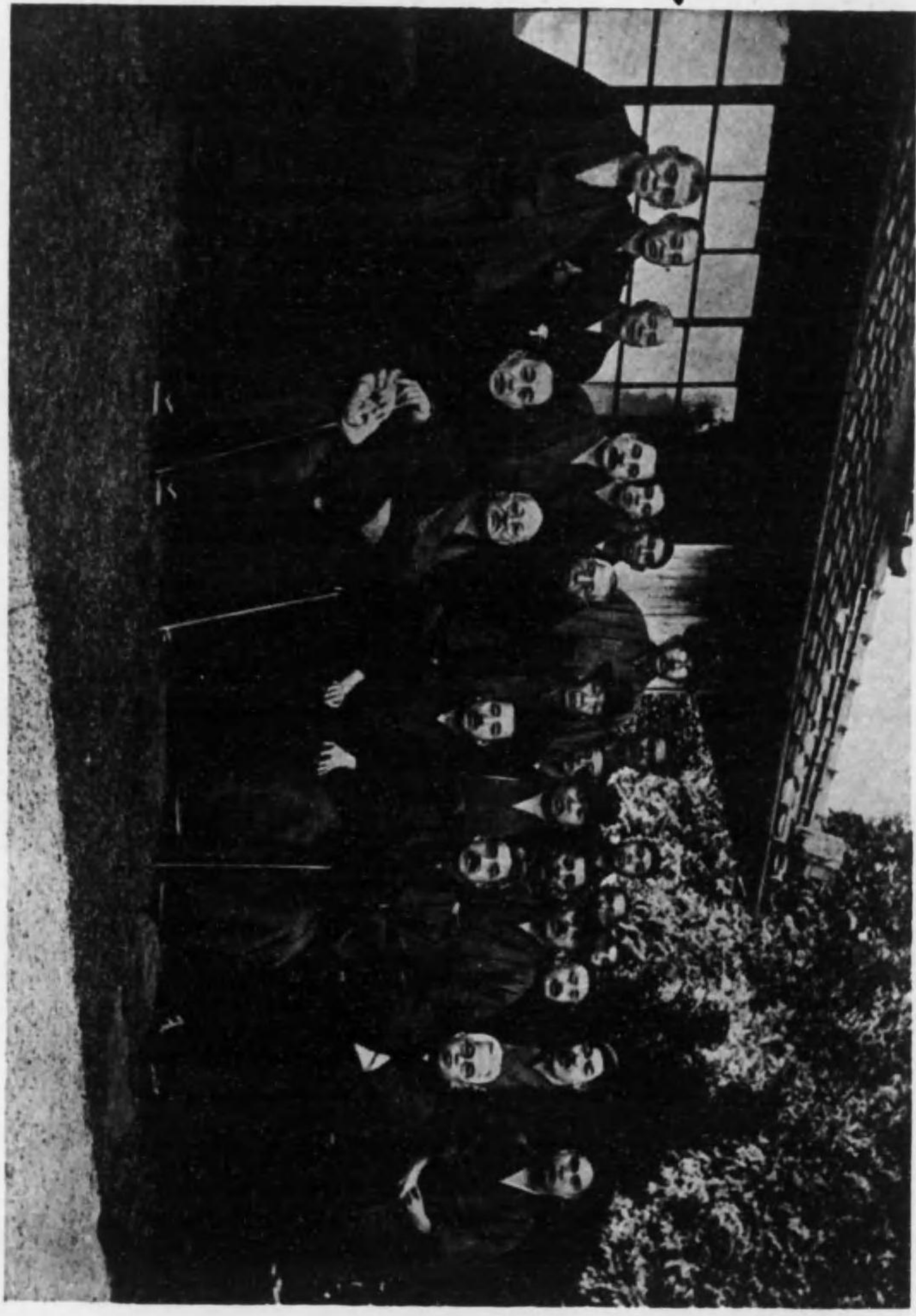
早川徳治氏

元田 肇氏

鈴木藤左衛門氏

上原重平氏

中村長五郎氏



影撮にて邸別子東伊町東伊日六月一年二十正大
 (照參節入第章四第)

- 中林景五郎
- 土原重平
- 鈴木總次郎
- 早川樹常
- 太田夏常
- 中林謙五郎
- 大津御民
- 磯島國吉
- 若瀬伸太郎
- 山田廣常
- 土田雅太郎
- 永田 肇
- 榎田忠太郎
- 時 藤 大 人
- 榎田清太郎
- 時 東 潮 忠 子
- 磯田重五郎
- 磯 田 幸 平
- 藤 田 末 次 三 郎
- 藤 田 豊 太郎
- 八 留 義 勝
- 御 月 龜 吉
- 小 齋 一 次
- 内 山 常 三



・氏一要元倉



氏章成名春



氏二研井石故



氏吉平川小



子郎四匡上井



伯平新藤後故



氏坦原大



氏郎太策泉小故



氏門衛左藤木鈴故



氏明嘉田八



男郎次禮槻若



氏肇田元故



氏平重原上



氏郎五長村中故
(代先)



氏恪森故



氏郎二竹次床故



氏郎治賢田太



氏助之寅木鈴



氏吉廣沼大故
(代先)



氏三岡田太故



氏二信河十



氏美重丸石故



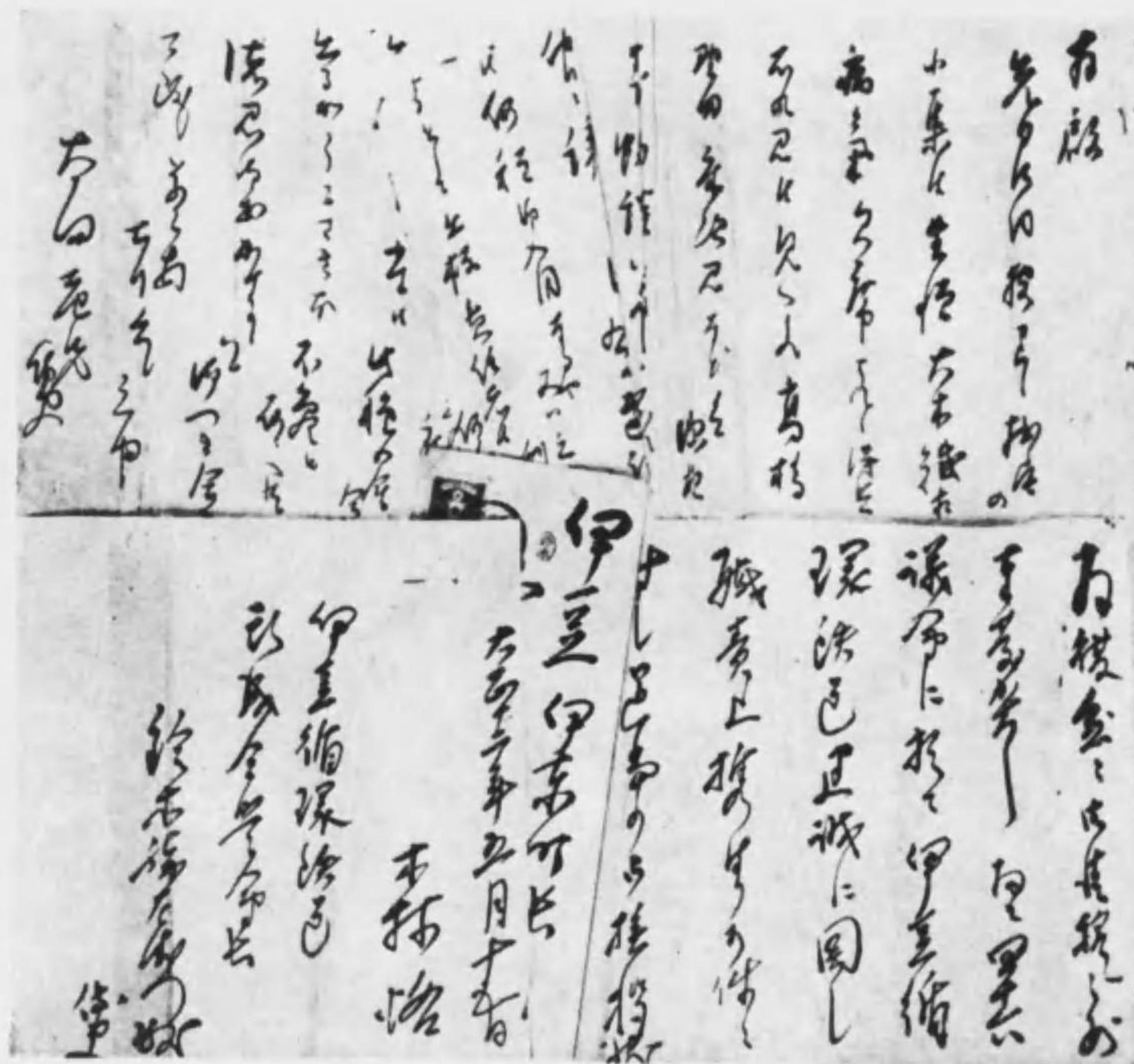
氏衛兵六田坂故



氏郎太徳木鈴故



氏郎太幾葉稻



輪書士議代兩森泉小故

(照參節十第章四第)

目次

第一章 緒言(交通年次表添付).....一

第二章 海の交通.....五

 第一節 汽船の出現.....五

 第二節 東京航路の成功.....六

 第三節 豆相航路の利便.....八

 第四節 伊東人よ海を生命とせよ.....九

 第五節 伊豆に港を作れ.....二

第三章 陸の交通.....四

 第一節 東京は二日の行程.....四

 第二節 駿豆鐵道による行旅の短縮.....五

第三節 小田原行の人車鐵道……………二六

第四節 伊東熱海縣道の起工……………二七

第五節 民設鐵道第一次計畫……………二八

第六節 自動車の惠澤……………二九

第七節 豆東鐵道計畫の頓挫……………三〇

第八節 道路改築を怠つて鐵道を希ふは贅澤……………三一

第九節 伊豆循環道路の隠れたる恩人……………三二

第十節 伊東熱海縣道の再破壊と復舊……………三七

第十一節 貨物自動車の發展……………三九

第四章 鐵道が敷設されるまで國有……………三〇

第一節 伊東迂回線の運動……………三〇

第二節 後藤總裁から講釋を聞く……………三一

第三節 鐵道事業に對する國策の推移……………三三

第四節 老大なる伊豆循環鐵道の計畫……………三五

第五節 鐵道療養所は約束手形……………三六

第六節 大村建設局長來豆……………三九

第七節 小泉代議士の心機一轉……………四〇

第八節 元田前鐵相伊東にて越年……………四一

第九節 石丸次官の口約……………四二

第十節 伊豆は國防上の重要地點……………四三

第十一節 上原參謀總長の一喝……………四四

第十二節 丹那墜道は伊豆線可能不可能の分岐點……………四五

第十三節 鐵道は人の頭から頭へ……………四六

第十四節 第二期新線中に再び落選……………四七

第十五節 衆議院に於ける第二次の建議……………四九

第十六節 豆南の海角に宰相を迎ふ……………五〇

第十七節 海南蘇峰兩文豪の半島周遊……………五一

第十八節 伊豆線の一部漸く決定す……………五

第十九節 伊東下田間の追加……………六

第二十節 伊豆線の頓挫……………六

第二十一節 伊豆線一部の復活……………七

第二十二節 下田延長中止を惜しむ……………七

第二十三節 感 謝……………七

第五章 結語及追録……………七

伊東町交通史物語

伊東線全通記念式委員部編

第一章 緒 言

八沖に見ゆるは初島と手石 はしま

山で高いが遠笠矢筈 とほがさやはす

誰をまつ川流れも清く

お湯で賑はふ伊東まち (伊東節)

その伊東町の賑はひ如何は、一に交通の良否によつて支配される。恰もよし鐵道伊東線が全通し、熱海驛から僅に十六キロ八六の地點に伊東驛が開業することになつた。その昭和十三年十二月十五日といふ日は何といふ吉辰であるのか、二十餘年待望の苦心が酬いられたる伊東交通史上の、輝かしい一エボツクとして全町民は歡呼に溢れ、更生の天地に新生命を息吹きする。

緒 言

ある人は伊東人の目標が三つのTだといふ。第一のTは鳥島、これは南三百海里の一孤島、黒潮が周圍に渦巻く有名な漁場である。寒暑を凌ぎ怒濤と闘ひ、板子一枚上を極樂と見て營々辛苦する漁夫たちこそは、町の富の半分を齎し歸る英雄兒である。第二のTは東京、何とかして都大路に住む人々と呼べば應へる隣同士になりたいといふのである。第三は徳利、陽西山に傾けば奇しき靈泉に沐浴して、心地よく一盞の晩酌にありつきたい。そのためには、日ねもす眞黒になつて働くことを敢へて辭さぬ意氣地だといふのである。

さて第二のT、東京との距離を縮めることは、交通の改善のみが最後の方策なのである。今こそ伊東線の全通に恵まれて二時間あまりで往復できるといふものゝ、顧みて過去の状態は果して如何やうであつたか。この小冊子は主として帝都を目標とする交通の變遷を考へて見ることであるが、唯だ資料乏しく、運筆鈍くして目的を遂ぐことの困難を豫め告白するものである。

交通變遷年次表 (經過年数は昭和十三年を零として週及する)

明治五、一	開通の時	經過年數	主	管	機	關	區	間	備	考
六	鐵道寮	鐵道	橫濱品川	本邦鐵道の嚆矢						

五、五、九	同	六	同	品川新橋	年次に疑あり、伊東は寄港地
一八、一、一	不詳(豆海丸)	五	汽船	下田東京	
二〇、七、二	鐵道寮	四	鐵道	國府津橫濱	駿東郡佐野驛開業
三、三、一	同	四	同	國府津靜岡	伊東は寄港地
三、二、一	東京灣汽船	三	汽船	下田東京	初め五日一航、廿七年より日航
二六、七、〇	豆相人車鐵道	三	人車鐵道	熱海吉濱	小田原町内開通は四年後の三三、六二〇
二九、三、三	同	三	同	吉濱小田原	
三、五、二〇	豆相鐵道	三	軌道	南條三島町	省線連絡
三、六、五	同	三	軌道	三島町三島驛	佐野沼津兩驛間に新設
同、同、同	鐵道廳	三	鐵道	三島驛新設	
三、七、七	豆相鐵道	三	軌道	大仁南條	
三、八、六	東豆汽船	三	汽船	下田東京	東京灣と競争五六年間繼續
三、一、一	靜岡縣	三	縣道	伊東大仁	全通以前既に中大見村以西は竣工した
四、一、一	同	三	同	伊東熱海線起工	
四、七、九	伊豆鐵道	三	鐵道	大仁三島間動力變更	豆相鐵道を承繼

四、三、一	三	東京灣汽船	汽船	伊東國府津	豆相人車を承繼
四、八、二	三	大日本軌道	輕便鐵道	熱海湯河原間動力變更	
四、三、三	三	同	同	湯河原小田原間同上	
大正四、六、三	三	鐵道院	鐵道	熱海線改訂工事	初代熱建所長就任の日による
六、三、一	三	伊東自働車	自働車	伊東大仁	東海自働車の前身
七、八、三	三	駿豆鐵道	鐵道	大場三島驛間電	六年十一月、伊豆鐵道を承繼
八、六、四	九	同	同	大仁大場間同上	
九、一〇、三	六	鐵道省	同	小田原國府津	熱海線一部完成
二、二、三	六	同	同	眞鶴小田原	國府津航の變更
同、同、同	六	東京灣汽船	汽船	伊東眞鶴	
一三、八、一	四	駿豆鐵道	鐵道	修善寺大仁	
一三、一〇、一	四	鐵道省	同	湯河原眞鶴	
一四、三、五	三	同	同	熱海湯河原	
同、同、同	三	東海自働車	自働車	伊東熱海	字佐美村地内一部徒歩連絡
一四、九、五	三	靜岡縣	道路	伊東熱海	字佐美村地内竣工につき全通

昭和八、六、一	五	同	同	伊東下田	對島村地内同上
同、同、同	五	東海自働車	自働車	伊東下田	同上
九、三、一	四	鐵道省	鐵道	熱海沼津	丹那トンネル竣工
一〇、三、三	三	同	同	網代熱海	伊東線一部開通
一三、二、五	四	同	同	伊東網代	伊東線全通

第二章 海の交通

第一節 汽船の出現

嘗て道らしい道を有たなかつた伊豆人の頼みとする交通機關は、たゞ船舶だけであつた。だから東伊豆に於いても千石船や押送船は夙に發達してゐた。その往航には石材、木材、薪炭、椎茸、山葵などを、復航には米穀雜貨などを滿載した。併し風浪の日が多く一年百日以上の休航があり、また時としては難破、濡れ荷などの損害があつて、船大盡の名を留めるものはなかつた。やがて明治文明が都鄙に瀰漫し、時化にも或程度進航し得る蒸汽船といふものゝ存在を知つてからは、之に戀々の情を寄せたのは當然の人情であつた。明治十八年(五十三年以前)頃、賀茂郡大川村(今

の城東村) 木村恒太郎氏の發起、松崎町依田佐二平氏(第一期の代議士)の賛成で八九十噸級の汽船豆海丸を東京下田航路に駛走せしめたことは、當時としては異数の計畫として沿岸の民衆を喜ばせた。三四年の間多少の缺損に堪へて就航を繼續したが、惜むべし下田へ歸航の途次、眞晝間であつたが川奈岬に近づいて坐礁し、一瞬に壯舉を挫いたのであつた。

第二節 東京航路の成功

明治二十二年(四十九年前)十一月、伊豆航路就業の目的で東京灣汽船會社が設立された。社長渡邊治右衛門氏は日本橋に明治あかじといふ海産物商を營み、伊豆諸港からの魚介類を扱つてゐた關係があつて、業務は順調に進んでゐた。當初は五日に一航、次は三日に一航、遂に明治二十七年(四十四年前)日清戦役の最中から日航となつたのは、成績の向上を證するに足り、昔の押送船時代に比して利便の増大したことは論ずるまでもないが、理想に走る乗客や貨主の方から見ると、どこかに不足不平のあつたのを如何とも出来なかつた。先づ往航船の伊東着が午後一時、鮮魚の多い時はこの碇泊に三時間以上を要し、次に網代でもまた三時間費すとすると、熱海發は午後七時を過ぎる。のみならず復び網代へ呼戻されて追荷を積み、その出帆が午後九時や十時になつたのは珍らしくなかつた。そののみか洋上で大風浪に出會はずと網代に引戻すか、乃至は三崎あた

りに不時着して、浪の靜まるを待つ。普通には朝四時頃靈岸島に着くのだが、魚河岸行貨物は即時解下舟に移しても、乗客は日出時まで河の上に時を待つ。婦人子供にとつては實に水盃でもして乗込むべきであつた。復航は靈岸島を夜九時に出帆し、風靜かにして熱海沖に午前五時着いたとしても、出迎船が岸を離れるのは七時を過ぎてからだといふ有様。伊東人にさへもこの苦痛あり、遠き下田あたりの客はもつと困難が多かつたのだ。

不平が鬱蓄して遂に競争を惹起し、三十五年(三十六年前)八月六日東豆汽船會社の出現となつた。社長中村音吉氏は賀茂郡下河津村見高出身、東京市に於いて三橋亭と名づけた西洋料理店二三ヶ所を經營しつゝあつた。當町に於て之に参加したのが中村長五郎(先代)、山田平三郎、青木八十八、稻葉幾太郎、飯島國右衛門の諸氏であつて、一時は東京灣と東豆の併行運轉となり、貨客の取扱も改善されて至極結構であつたが、數年の後無益の競争を繼續するの不利を覺つて、双方妥協を行ひ、東京灣側の獨占に復したが、爾後各碇泊港に荷主總代を設置して、復び專横の譏を繰返すことはなかつた。

その後追々陸上交通が改善され、殊に熱海驛の開通を見た後、伊豆航路の貨客とも其數を遞減したので、東京灣汽船は新に大島の開發を志こころざして、營業の大轉換を行ひ、成績の向上は著しい

ものがあり、尙ほ別に伊東大島間の交通も前途益々有望視されてゐる。なほ伊豆航路は目下發動機船を以て、主として貨物の輸送に従事してゐる。

第三節 互相航路の開始

明治四十一年(三十年前)三月、東京灣汽船會社は伊東國府津間に一日一往復の航路を開き、思ひ設けぬ利便を旅客に提供した。往路は伊東發午前七時、網代熱海を経て國府津着が正午、そこから汽車に搭するといふ行程。復路は國府津發午後一時、熱海網代を経て伊東着が午後五時となる。この就航船は主として旅客用であつた爲めに、貨物積卸しに大なる時間を浪費せず、大に喜ばれたものであつた。この互相航路は十五年間繼續したが、熱海線工事の進捗に伴つて變化せざるを得なかつた。

大正十一年(十六年前)十二月廿一日省線眞鶴驛が開業したので、汽船は國府津への往復とも眞鶴港を經由したが、翌年初春遂に後者を終點として同港國府津間を閉鎖した。なほ伊東眞鶴間は一日二往復となつて利便は益増大した。

好日和だと船の上は申分のない陽氣である。甲板に出て渺茫たる大海原の壯觀を展望し、陸上に移り行く風光を飽くまで鑑賞することができる。併し風波となると互相航路四時間さへも堪へられぬ苦痛となり、大の髯男までが小間物の開店となつては眼も當てられぬ。國府津時代もさうであつたが、眞鶴時代の如き、折角東京から越し來つても、今日は風で休航ですと申渡される、サア大變だ。熱海までハイヤで飛ばす高率賃金は假りに忍ぶとしても、熱海に無駄な一泊を餘儀なくされるか、山駕籠を賃して多賀の一杯水と、網代峠の二軒茶屋を越さねば伊東の土を踏み得ない。それが望ましくなければ眞鶴から國府津に引返し、省線三島驛、私線修善寺驛と大鍋鉉の遍路をすることゝなつて、用もない眞鶴見物を強いられたと同様の始末である。かうなると伊東行はもう眞平だと輾轉される。

十四年(十三年前)三月熱海驛開業の後、眞鶴航路は閉鎖したが、伊東熱海間の航路は現今なほ繼續して相當の成績を示しつゝ、旅客に便する所は少くない。

第四節 伊東人よ、海を生命とせよ

大正四年(二十三年前)東京灣汽船會社は旅客専用の新造船を艤裝し、之を伊豆航路に就かしめた。従來の貨物兼用船と異り施設頗る壯美であつて、衆人の満足は一方ならぬものがあつた。その初航海には有力新聞記者二十餘名を招請して、ある薄曇りの午後玖須美の濱に投錨。先づ海岸

茶屋に小憩、次いで舊蹟一巡の後小學校講堂に於いて町民のために講演會を催し、了つて鈴木町長は一行を三枝別邸に招待して、あの宏壯なる浴室にて豊富な温泉の快味を供與した。

講演の第一席は有名なる某氏、第二席は志賀重昂氏であつた。當時の記憶を辿つて志賀氏所説の斷片を検し、その教訓の永久性を翫味しよう。

「前辯士は一時間足らずに十回水を呑んだが、腹をこわさねばよいと心配してゐる。我輩は二時間でも三時間でも水を呑むことの必要は感じてをらぬ。——文明の標準は種々の方法で測定し得るが、菓子も亦尺度である。今日海岸で接待された菓子は、蓋し舊幕時代の田舎菓子と大差ないであらう。之を思ふと伊東町發展の前途はまだ——遑遑ではあるまいか。——今日は生憎展望が不十分、波もあつたので、口の達者な記者諸君も大半酒量に悩んだやうだが、我輩はあれしきには驚かなかつた。惠比壽丸は客船だといふことであるが、英佛の船を見て来た我輩は、これが客船ですといふ自慢を歐米人に聞かせたくないと思ふ。併し次のやうなこともある、即ち英國の貴族富豪は二十尺位のヨットでドーヴァー海峡の波を截ることを大なる興味としてゐる。さすが大英國は波浪を支配するといふだけあつて立派な海國ぶりである。バイロンの詩集を見ると大海と怒濤の壯觀が何百首となく謡つてあつて、平安朝歌人の「鳥かくれ行く船をしぞ思ふ」とは規模が全く違つてゐる。ヨットに較べると惠比壽丸は幾十倍の大きさと幾百倍の安全性を具へてゐるが、それで酔ふたのではお話にもならぬ。室町時代に朝鮮や支那の海岸に猛威を揮つた倭寇の歴史を顧みて、現代人は宜しく慚死するがよい。——伊東人は海を生命とし、船を唯一の交通機關とするから、立派なる海國人として、海の日本を寄託するに足りるだらう。日本書紀應神天皇の巻に、五年冬十月伊豆の國に科して船を造らしむ。長さ十丈、船既に成り試に海に浮べしむ。便ち軽く泛きて疾く行くこと馳するが如し。故に其船を枯野と曰ふとあつて、伊豆造船史は頗る古いが、枯野の造船地は伊東より外には考へられぬ。慶長年間ウィリアム、アダムスは家康の命を受けてスクーナー船二隻を造つたが、それも伊東に於いてではないか。遊就館に安宅丸の圖といふ御座船の彩色圖繪があつて伊東に於いて之を造ると傍書してある。船に由縁の深い伊東から、海國日本を背象つて立つ人士の續出せんことを我輩は望んで止まぬ。……之を次節下村海南氏の説示と併観するときは、伊東の人たるも宜しく三省して、達識者の高教を感謝せねばならぬだらう。

第五節 伊豆に港を作れ

大正十一年十一月、田方賀茂二郡代表者は勇を鼓して横須賀に鎮守府司令長官財部彪氏を訪ひ、伊豆鐵道速成運動後援者たらんことを懇願した。翌日復び東京の私邸に面謁して具さに意の存す

伊豆に港を作れ

る所を開陳し、後に井出海軍次官に陳情するの機会をも與へられた。長官話次の一節に曰く伊豆人は鐵道と同時に港灣修築のことも考へねばならぬ。若しも熱海下田間鐵道敷設に要する千數百萬圓と同額の資財を抛つならば、伊豆東西兩岸長汀曲浦のすべてが良港と化して尙ほかつ餘剰があらうと。流星は海の將軍にふさはしき尊い教訓であつた。

十五年夏下村海南氏が伊豆周遊の際(第四章第十七節參照)、また港灣修築急務の説示があつた。これについて同氏は「伊豆めぐり」の末尾に於いて次のやうに述べられた。

「こゝでいよいよ伊豆の旅を終る。もしこれが歐米の天地であつたなら、富士の山麓を一周し、少くとも一線は分れて長尾峠より箱根に通じ、更に三島を下り、沼津、三津、長岡、修善寺、韭山の環狀線から天城越えの下田線。そして熱海より三島、伊東への二線の外、箱根、十國峠間の尾根傳ひの線などは、自動車を驅り電車を走らしむべき眼貫きの線として出来上つて居るであらう。沼津から戸田、土肥、仁科、松崎を経て石室崎を中心に下田まで、更に白濱、河津、伊東、熱海まで觀光専門の船は横付になつた棧橋から奏樂のうちに動きだす。甲板の上に食堂もありバーもある。樂の音を耳にして逐ひくる鷗の群に餌を投げやりながら、船は長汀曲浦を縫ふてゆく。陸上のトンネルで煙にむれるよりも、海上のデッキの上の方がどんなに氣が利いてるか分らない。嗚や伊豆海岸めぐりの船はお客の目白押しで賑はふことであらう。

恐らくこの海岸めぐりや、初島見物ぐらゐでは満足できぬ。役小角や八郎爲朝で知られた大島、英一蝶や竹内式部の流された三宅島、浮田秀家の流された八丈島など、伊豆の島々が南にはしつてゐる。七島めぐり八丈行、更に小笠原島行の觀光船も出来てゐるだらう。

まア船が嫌いな海國男兒、海を恐るゝ大和民族に、こんなこと云ふのは今更野暮かも知れぬが、併し存外夢のやうなことも實現せぬとは限らない。徳川鎖國前の日本人は、八幡船で海上を家として南洋三界まで發展したのだから。……

海南氏はこの御筆先だけでなく、理想を直ちに實行に移された。即ち翌昭和二年夏、東京朝日新聞社の催しとして四千噸(?)の豪華船日光丸を仕立て、五百名の讀者を載せて靈岸島を出帆、七島めぐり八丈行、下田港解散といふ壯舉を試みられた。その節。需めに應じて鐵道期成同盟會出版に係る海南氏「伊豆めぐり」、蘇峰氏「伊豆遊記」の合冊を太田町長から全部の乗客に贈呈した。財部下村二巨人の懇諭は實に肯綮に中つてゐる。また決して之を無駄に開流すことなく追々花と咲き實と成つて、東海岸に於いては伊東、稻取、下田三港の修築を了り、多賀、網代、宇佐美、川奈、富戸、八幡野、赤澤等の浦々には船溜の施設を見たが、いづれも規模過小であつて理想に遠く、汽船横付といふまで出来てゐないので、二巨人の期待に副はぬことを慚ぶるものである。

これ等は地元負擔金の重荷ある關係上、急速に事を運び得ぬのでもあるが、その將來の擴充計畫は一へに後賢の出現努力を待つばかりである。

第三章 陸の交通

第一節 東京行は二日の行程

七百八十年の昔、鎮西八郎爲朝が大島に流されたときは、伊東から船に乗つた。源頼朝が入道祐親の双を免れて逃げ去つた道は網代多賀の峠越し、多賀には頼朝の一杯水といふ舊蹟がある。幕末吉田松蔭の下田行きは東海岸の嶮路からである。松蔭以來舊態依然たる悪道路が大正年代まで續いたことを顧みると、能くも不便不自由が忍ばれたものだと思ひやられる。

明治五年（六十六年前）新橋横濱間に日本初めての鐵道が運轉された時には、遂に其餘澤をわれ等の先人に及ぼし、神奈川驛が其乗降口になる。熱海は早く小田原方面へ道を開いてゐて、明治十三年頃所謂熱海會議へ出席した元勳達は、小田原から後押し前牽き三人がりの人力車を賃したらしい。一般庶民は東海道筋を馬車によつたのだが、幾たびも乗り継ぎや待合せがあつて、行程を時間で豫定することは出来なかつた。途中物貰ひの群が馬車を追ひ、一錢なり二錢なり恵

まれぬ限り幾町となく喰付いてくる。どうしても途中一泊、つまり伊東と東京間は神奈川驛から汽車に乗るとしても二日の行程であつた。

第二節 駿豆鐵道による行程の短縮

明治二十二年（四十九年前）鐵道の東海道線が静岡まで竣工した。當時建設列車に便乗して負傷した縣知事關口隆吉氏が、遂に落命した悲話もある。この時駿東郡佐野驛（今の裾野驛）が開設されて、伊豆人に利用の便を與へたが、當町方面からも盛んにそこ迄出て行つた。其經路は、宇佐美、浮橋から南條又は北條に出で、そこからは馬車の便もあつたが、馬車には待合はせ、乗り継ぎの不便が附物で、相變らず行旅を惱ませた。だが朝早く立ちいづれば、午後七時頃には新橋に着き得たのである。

三十一年（四十年前）佐野沼津兩驛間の下土狩に地を選み、こゝに三島驛が開設されて、豆相鐵道が連絡することゝなつた。豆相鐵道も初は軌道法に依る運轉で僅に三島南條間、その翌三十二年に大仁まで延長した。この鐵道の出現は直に當町の交通にも變革を齎し、人々は龜石峠を越えて南條驛（今の伊豆長岡驛）に出さへすれば、悠然として車中の客となり得たのである。そして手順の能く運ぶ場合には、この新機關を利用すると伊東と東京との距離が十時間に短縮され得た。

なほ互相鐵道の創立者は渡邊萬介、小柳出五郎、費川邦作の諸氏であつた。四十一年には動力を變更して鐵道となし、名稱も伊豆鐵道と改まり、利用は益々増大した。恰もよし三十九年（三十二年前）中、伊東大仁縣道が全通して澤内峠に馬車が通ひ、途中冷川の乗継ぎで大仁驛と交通することとなり、傘なしで東京へ往復し得たなど誇る人もあつた。

因に大正六年創立された駿豆鐵道會社は、この伊豆鐵道の事業を承繼したもので、七年から八年までの間に全線を電化し、更に十三年北狩野村柏久保に終點を延長し、修善寺驛と命名した。十四年熱海驛の開業と共に當町東京間の交通は、舊路を棄て、新道路に變更したが、昭和九年丹那トンネルが貫通す前西行には駿豆鐵道に依據するの外なかつた。

第三節 小田原行の人車鐵道

明治二十八年（四十三年前）熱海町にレールの上を人力で推進する人車鐵道といふものが出現した。發起人は熱海町石渡喜右衛門氏外二十名であつた、初年は熱海から吉濱まで、次年は小田原に延長、三年目に小田原町内を修築したが、遂に國府津行き電車とはうまく連絡せすしまつた。それが四十一年（三十年前）中、雨宮敬次郎氏の大日本軌道株式會社に併合され、同時に人力牽引を蒸氣力に變更して輕便鐵道となつた。輕便になつた後も動力は微弱、座席は狭小、乗車券は前

日前々日の豫約といふ陋態であつたから、當町の人は據ない場合の外は別の交通路を採つてゐた。雨宮氏はこの鐵道を當町に延長する意圖あつて、大原坦氏は屢々相談に接したが、何にせよ利用すべき道路が無く、若しも専用道路を敷設するとなると收支相償はず、遂に進んで知事李家隆介氏に後援を求めることゝなつた。李家知事は雨宮氏に對して縣道改修を約束したものの、適當の時期までには工事を完了し難かりしのみならず、別に他の支障ありて輕便鐵道の伊東延長は實現を見るに至らなかつた。因に大日本軌道は熱海線改良工事の進捗に伴ひ、大正九年中政府が之を買收してその運轉を停止した。

第四節 伊東熱海縣道の起工

明治四十年（三十一年前）縣道伊東熱海線が熱海方面から工事に着手することになつた。その頃政府に於ては日露平和回復紀念の一事業として四十五年に萬國博覽會開設の意圖あり、本縣に於いても之に呼應する施設を考量し、李家知事は外客誘致の一策として熱海から伊東に通ずる縣道を改修するの案を具體化したのである。併し工費の増大を憚つて幅員僅に九尺、かくては人力車の摺違ひさへも容易でない。沿線多賀村（今は熱海市に屬す）出身の倉田直平氏非公式の席上、之を詰つたところ、知事曰く完成後は雨宮の輕便鐵道を走らしめるのだ。歩行に堪へるものは從來の

山道で我慢するが可いではないかと。有るは無きに優ること萬々であるのだから、沿道町村も遂に九尺幅員に甘んじて工事が進められた。

然るに萬國博覽會はお流れとなり、その開催豫定の四十五年には道路も漸く多賀村の中心部に達したゞけで、輕便鐵道の利便には遂に浴し得なかつた。その上幾多の故障續出し工程遅々として進まず、大正大震災に際しては既成部を大破して之が復舊に九十餘萬圓を費し、當時未改修の宇佐美村地内の工事費としては別に廿三萬餘圓を費して、その全通は大正十四年(十三年前)九月であつた。起工以來實に十有九年の長歲月を閲した。

第五節 民設鐵道第一次計劃

大正二年(二十五年前)十一月十日安立綱之氏を發起人總代としたる伊東鐵道株式會社は熱海伊東間に輕便鐵道を敷設することの免許を得た。安立氏は前警視總監であり、相當の富豪を背景として其實現に苦慮し、線路の豫測、株式の募集等に多大の努力を拂はれたが、時期未だ至らずして事の成らざりしを惜むのである。當町に於いては町長大原坦氏が斡旋これ力められた。いま同會社の株式募集趣意書を見ると、當時の交通及其對策に苦悶したる民情を知るに便宜あるを以て大部を次に載録する。

「氣候の順、風光の美、天與の溫泉は實に伊豆半島が天下に嘆賞せらるゝ所以にして、四時旅客輻輳の巷となり、物質豊富を呈するの因となる。伊豆半島中、京濱の地に近き熱海の盛況は言はずもがな、是に隣接せる伊東の地亦其の著敷ものあるなり。然るに海陸の交通は如何。尙舊套を脱せず、不安なる海路に據らざるものは、陸上甚敷困難を嘗めざるべからず。此交通不便の今日に於いて、伊東の地が既に世人の注目を惹くの大なるは、明かに同地方將來の多望を示すものと謂ふを得べし。若し夫れ一度陸上の交通便利なるに至るあらん乎、沿道の發展は勿論、網代伊東一帯の進歩は必ずや刮目して待つべきものあらん。加之、海に陸に豊富なる産物は運輸機關の完全と共に益々増殖すべきこと、今此に贅言を要さざるなり。

曩に鐵道院は東海道本線を熱海經由とせんと企畫し、既に用地の大部分を買収し終り、近く工事に着手せんとす。試みに其の竣工の曉に想倒せよ、而目更に一新し、京濱よりの往復は極めて簡易となり、今日小田原に至るよりも容易となり、以西各地よりするもの亦車行の途次なるが故に、此に昇降するもの増加すべきを以て、旅客の群集は勿論、一面之に伴ひ貨物の集敷は加はり、此地の繁盛は一般の進境を來すや明かなり。此時に至り熱海伊東間の交通にして現在の儘ならん乎、此福利を受くるを得ず、天與の恩恵を逸すものと謂はざるべからず。若し夫れ之に反して熱海伊東間の交通にして利便なるに至らん乎、熱海に來るものは必ず足跡を伊東に及ぼし、客貨の出入股盛となるは當然の事なり。殊に今や都會の人は附近の地に飽き、旅趣を其の他の處に求めて止まざるものあるに於いてをや。(以下省略)。

第六節 自動車の惠澤

大正六年(二十一年前)二月、伊東自動車株式會社が當町に創立された。その創立趣旨書には伊東町を交通上の孤立から救済するためにとあつて、發起人總代中村長五郎氏(先代)は老來益、漲る元氣を以て新しい交通機關の誕生と成育に盡瘁された。元來當町に自動車を乗入れたのは三島町津田守三氏が先鞭であつて、既に明治四十四年(二十七年前)のことである。同氏は自動車を以てする旅客運輸の突飛なる企圖を抱いて、先づ田方全郡下を試走したのであつたが、當町の如きも少なからぬ示唆を與へられたものである。伊豆に於いて營業として初めて具體化したのは大正四年に開始した下田自動車會社であつて鈴木吉兵衛氏が社長であつた。その頃天城越えの道路に比して澤内越えの冷川道路の方が遙に劣等で、伊東大仁十八哩の間にはカーヴも多く、幅員十二尺に満たぬ箇所が點在したため、監督官廳は伊東町からの許可申請を久しく決裁しなかつた。この間縣會議長山下久二氏の好き幹旋と、中村翁の至誠は遂に當局を動かすに至つたのである。拂込資本金一萬貳千圓、ウィツク乗用車二輛を購入して大仁間一日二往復とし、片道三圓、外に夜間とか雨天とかには割増を徴收した。その花々しい開業式が三月中行はれたが、知事安河内麻吉、警察部長齋藤宗宜、保安課長高橋雄豺の諸氏が特に臨席して前途を祝されたのは、如何に自動車

營業なるものを監督官廳が重要視したかを知るに足る。

伊東大仁間一時半、それから駿豆鐵道、省線鐵道を経て東京まで通計六時半乃至七時にて用足り、從來より三時間を短縮し得たことは當町交通史上の大變革であつて、都人士を誘致する上に多大の貢獻をした。

伊東自動車は逐次營業を活潑にし、三島町の駿豆自動車、沼津市の旭自動車等を併呑してからは、名稱も東海自動車と變更、走行區域も擴大したのみか、大正十四年(十三年前)春、熱海驛開業と共に伊東熱海間十六哩の運輸に従ひ、成績は向上の一路あるのみであつた。當初この區間宇佐美村地内は道路改修中であつた爲め、徒歩連絡の不便はあつたが、往く人來る人この小苦痛を物ともせずして殺到する有様で、同年九月縣道全通以後は一層の好成績を擧げて行つた。

昭和三年六月中、同會社は大倉系の經營に移り、爾後下田自動車を合併し、昭和六年及七年中、伊豆東西兩海岸縣道が貫通してからは、風光伊豆の遊覽奉仕に當る同會社の活躍目ざましきものあり、本邦斯業界の耨者として其名聲は殊に著しいものがある。

第七節 豆東鐵道計畫の頓挫

大正八年九月豆東鐵道株式會社發起人は伊東熱海十三哩間の鐵道敷設を出願し、翌九年三月免

許を得た。これより先、歐洲戰爭の影響から本邦は未曾有の輸出國となつて、景氣はいやが上に昂揚、伊豆の各温泉場の繁昌ぶりも素晴しく、某地に於いては一旅館を借切つて豪遊した今成金もあつたといふ。遊覽客の人の波を見ては交通を舊狀に止めて置けぬといふ譯で、伊東熱海鐵道の出願は三四の多きに達した。豆東の發起人は東京市渡邊勝三郎氏を首位として、渡邊四郎、辰澤延次郎、若尾謙之助(以上東京)、高木太郎(横濱)、中村長五郎、菊間鶴藏、佐藤吉兵衛、太田賢治郎(以上伊東)、石田政式(宇佐美)、平井正之助(網代)、野田久七(熱海)の十二氏であつた。計畫の主要は軌間三呎六吋、レール七十ポンド、低壓直流電氣六百ボルト、架空單線式、三箇年完成、事業資金三百五十萬圓となつてゐた。東伊豆方面に於いては之が實現を祈りつゝ多大の聲援をなしたのであるが、その後經濟界に狂瀾怒濤が逆まき、渡邊氏は實地測量、株式募集その他の準備に莫大な支辨をされたのであつたが、一旦崩れ出した財界の悲況は年を逐ふて深刻化し、この壯圖は果なくも一擲されるに至つた。

同鐵道に對する期待が大きかつただけに、その頓挫を見て地方の失望は小さいものでなかつた。さればとて交通の改善は一刻の遲滯を許さず、時恰も政府に於て地方鐵道普及の大々的計畫を進めつゝあつたので、人心は自然國有鐵道を請願して、國策の潮に便乗せんとすることゝなつたが、

この鐵道運動の如何に熾烈に行はれたかといふ経緯は第四章の記述に譲る。

第八節 道路を怠つて鐵道のみを希ふは贅澤

大正十一年秋のある日、鐵道省の一室に於いて三人の課長が鼎坐して、當町代表者連から敷設陳情を聞いてくれた。時に一課長は莞爾として曰く、伊豆の風光や物資の話は耳に厭ひの出るほど諸君から聞かされた。さほどであるならば嘸や生活程度も高いだらうし、生活程度が高ければ公共施設も相當なものであらう。然るに豈に圖らんや伊豆に道らしい道がない。或はまた地元負擔金の賦課に堪へないから道路の修築は怠つて、全額國庫支辨の鐵道敷設だけを請願するといふのでは、少し蟲が善すぎはしないかと。この刺すやうな揶揄を受けて代表者たちは慚入るばかりであつた。

併し町として道路の改善を怠つてはゐなかつた。伊東熱海縣道は明治四十年(その時より十五年
前)より着手されたが、工費の多大と道路組合町村の不一致とから工程遅々として進まず、偶々篤志家熊城鐘三郎氏から立替金による速成を献策されたが、當時縣の會計法規が之を認めない爲めに成就せず、一に縣當局の好意的發案に待つのみであつたが、當町から切々の懇願は漸く實を結び、知事道岡秀彦、土木課長藤宮惟一、縣會議長山下久二の三氏熱談の結果、工事費二十三萬

四千圓、二ヶ年完成といふ案が十二年三月縣參事會の協賛を得ることとなつた。その頃一路線のみならず大金を一時に支出したる前例なく、その提案の通過を安全ならしめるために、議論の多き通常縣會の機會を態と見送つて、縣參事會といふ比較的纏め易い代決機關に附議した好意的の計策であつた。また地元負擔金の率は當時四割であつたが、之は陳情による例外の經理だといふので五割といふ前例なき高率を賦課された。

その年九月一日の大震災は到る處に猛威を揮ひ、伊東熱海縣道に在つても其既成の大部分を破壊されてしまつた。この復舊費(幅員擴張費を含む)は八十萬圓の多額に上つたが、復舊工事と新規工事とが併進して敢行され、十四年三月熱海驛開業當時はまだ一部に徒歩連絡を餘儀されたが、同年九月廿五日に至つて竣工全通し、伊東と東京とを結ぶ重要にして且つ殷盛なる道路を造りあげた。そして關係者は時々鐵道省一課長の皮肉が無駄にならなかつたことを追懐して感謝した。

第九節 伊豆循環道路の隠れたる恩人

大正十四年(十三年前)十二月、静岡縣會は伊豆大循環道路速成改築案を、幾多大土木工事群に含めて可決確定した。之は知事伊東喜八郎、庶務課長坂本藤八、土木課長萩野廣氏等の大勇斷であつた。それ等大土木事業特別會計の總額千六百萬圓、七箇年繼續。これが財源は清水港埋立地

賣却代金九百九十萬圓、地元負擔金其他六百餘萬圓となつてゐた。その中東伊豆の分(主として田方郡對島村地内)七十萬圓、四ヶ年完成。西伊豆の分(賀茂郡仁科村から田方郡土肥町を経て中狩野村に至る)九十萬圓、五ヶ年完成の計畫であつて、實に理想的の規模であつた。

この大土木事業に關係ある町村は歡喜して之を迎へ、縣會の開會以來地元選出の議員を鼓舞して止まなかつた。事業に關係なき地方の議員と雖も、資源が土地代金であつて、縣費の増徴には及ばぬことゆゑ異議は無い筈であつたが、さう易くは行かなかつた。將來七年の先ならでは埋立が完了せぬとすれば、埋立豫定地は現在の海面ではないか、海のものとも山ともつかぬものを一坪何程と評價して、それで縣財政の堅實を口にし得るかといふのが、反對論の急所であつた。併し遂に可決確定といふ幕を閉ぢ得たのである。

伊東知事の英斷は永く關係地方感謝の標的となつてゐるが、同氏はその翌十五年九月茨城に轉出された。その静岡市に於いて行はれた送別會前夜の小集會に於て同氏は當町一出身者の質疑に答へて次の物語をされた。即ち曰く伊豆循環道路のことは僕の理想案でもあるが、また押付けられた問題でもある。實は東京に出て知名の人から責められるのが伊豆の交通問題であり、いづれの省からいづれの先輩からも難詰され、殊に某議長や床次竹二郎氏や財部彪氏等からは種々懇

篤なる教示さへ賜はつてゐた。年々縣會に於て建議されてあることは知つてもゐたが、財政の安排が容易でなかつた處へ、幸にも坂本庶務課長が經理方法を案出してくれたので斷行したまであると。

然るに年一年、不幸にして當時の反對論に近い現象が見え出して埋立地賣却が容易でないとなつた。従つて一時は七箇年大計畫の前途に少なからぬ迷雲を漾はしたこともあつた。次いで松本學氏來りまた轉じ、昭和二年五月、長谷川久一氏の來任となつた。同氏は七月に入り當町視察を試みられたが、偶々鐵道事務調査に來られた熱建所長楠田九郎氏と宿を共にし、互に懷舊の情緒を吐露される一光景を現出した。その頃東伊豆の道路は前述の事情下に停頓中であつたので、楠田氏は伊豆開發の急務を説いて談たま／＼道路の速成に波及し、且つ曰く伊豆に對しては縣廳よりも寧ろ鐵道省の方が多分の好意を寄せてゐると。こゝに至つて巨大漢長谷川氏が瘦身軀の楠田氏に一籌を輸した形となつた。

長谷川氏は夙に縣財政建直しの腹案あり、やがて官民を網羅する財政調査會を設置し、清水港特別會計の如きも全く面目を更めて、一時憂慮されたる大土木事業は組替を新にして、順次歩を進められることとなつた。凡そ功勳といへば發案者を第一に推すを當然とするが、伊東知事を動

かした大官各位、長谷川知事に苦言を呈した熱建所長も亦忘るべからざる伊豆道路の恩人といはねばならぬ。

循環道路は前述の理由の外にも種々の障礙に逢着して、多少遷延を見たのだが、西伊豆の部分は昭和七年の秋、東伊豆の分は八年六月上旬完成し、宿望全く酬いられた後のわが伊豆半島は、觀光第一の譽を今天下に恣にしてゐる。

第十節 伊東熱海縣道の再破壊と復舊

昭和五年十一月二十六日突如襲來した北豆大地震のために、川方郡下は再度の災害に喪心した。この時伊東熱海縣道も復び破壊して交通一時斷絶し、辛ふじて數ヶ所の徒歩聯絡を経て熱海驛と往復した。本縣の災害復舊費は土木事業等内務省關係約三百萬圓、耕地山野等農林省關係約百五十萬圓。知事白根竹介氏は國庫補助を申請して中央と折衝を開始し、情を具して哀願これ力めたので、安達内相及町田農相は略々之を是認したが、井上藏相は其頃三陸大津浪の突發による補助金支出の爲め、國庫に餘剰なきを理由として、補助率半減を以て甘んずるか、然らずんば計畫を半減せよとのことで、頗る頑固に拒否態度を示した。六年一月下旬以來縣主腦部は東京滯留を續け、本縣選出の貴衆兩院議員の後援を以て大藏省當局と連日の談判をなし、日本俱樂部に中食を

共にしては方策を練り、地元關係の縣議及町村長は衆議院内燕巢軒を會場として憂鬱の日を送つた。當時南伊豆に養病中であつた小泉代議士は、形勢の非なるを觀て急に郷里を發し、二月二十日夕刻入京した。白根知事倉元代議士及一二の部下の出迎を受けつゝ相伴つた麻布邸に歸着、知事より豫算概要及政府交渉顛末を聽取して、難關の井上藏相なることを悟了した。

その夜中、倉元氏の奔走の結果、藏相は翌二十二日早朝自邸に在つて小泉氏を待受ける約束ができた。當日珍らしく早起した小泉氏は約束の時間を履行して藏相と會見、次に行きつけの理髮店を経て登院、中立の身輕さは第一控室に立寄つて装具を脱し、少壯社大議員等の挨拶を軽く會釋して、直ちに閣僚控室をノックした。そこには幣原臨時首相はじめ閣員いま方に出揃つたばかり、先づ安達内相から、珍らしや三申君と挨拶を受け、時に君は今朝井上藏相を口説き落してくれたさうで、今藏相から一伍一什を聞いたから、町田農相と共に君の手柄を感謝してゐる處だ、藏相も君が病軀を提げて上京した勞苦に酬いたとのことだといひ、藏相も口を添へてその通り／＼と應酬した。交歡數刻、議場に用なき中立議員小泉氏は麻布に歸つた。

やがて招きに應じて白根知事及一縣議は再び麻布に行き、中食の間主人から朝來の顛末を聞いた。要するに國庫豫備金僅小のため到底知事申請の全額を一時に支出することは出来得ぬ、依つ

て内務省關係を二箇年分割、農林省關係を三箇年分割として應諾しようとなつた。主人から大凡工事といふものは思ひの外に永引くこともあるから、白根君そこで我慢してはどうであるか、安達君からも内務大臣の手傳をして貰つたといふ御禮を受けて來たよとの話。當時白根知事の満足は尋常でなかつた。要求が通ふらなければと辭表を懷中してゐたが、お蔭で知事として縣民に合はせる面目が立ちますとまで欣んだ。この事實は同年三月下旬開會された縣參事會の砌、控室に於いて白根氏から感激を以て打明けられたる處で、静岡縣秘話として傳ふる價値は十分だらう。

前提が長すぎたが、その災害復舊費三百萬圓の中に、伊東熱海縣道復舊費約三十萬圓を含むために、以上を伊東交通史の一話題としたのである。これが無傷のまま豫算となり決議となつて、聽て實際工事へと着手されたのである。あの長々しい百六十間の網代隧道や、歐洲中世の城壁に似た幾つかの片トンネル等は、この復舊費を以て支辨され、その他狭少部曲折部等の擴築など思ひ切つた出來榮えである。猶ほその後田中知事の昭和九年以降は伊東熱海間に鋪裝工事を開始し、この間の道路をインターナショナル、ロードとして、川奈觀光ホテルに外客誘致を計るといふのが、本縣土木部現下の意圖である。

第十一節 トラック業の發達

道のない處自動車無用であるが、東伊豆は大正十四年九月伊東熱海縣道全通、昭和八年六月伊東下田縣道全通等の交通改善があつてから、トラックに依る運輸業が逐年活潑となり、京濱は申すも愚か、北は福島、仙臺、西は名古屋、坂神等、道のある所距離の長短を問題とせずして貨車の轍を地上に刻みつけてゐる。車體主の算盤高い經營談や、運轉士の勇敢なる運轉ぶりについて逸話も少くない次第であるが、その今後の發展を祈りつゝ、筆は次章に飛ぶこととする。

第四章 國有鐵道の敷設されるまで

第一節 伊東迂回線の運動

明治四十三年（二十八年以前）わが伊東町に於ては、政府計劃中の熱海線を寧ろ伊東迂回線に變更せしめたいといふ、大かゞりの運動を起した。これは鐵道當局に對する運動といふものゝ皮切でもあつた。

元來東海道鐵道の中、箱根越えは勾配四十分一の箇所が多く、それがため列車運轉の敏捷を缺くのみならず、周期的水害があつて當局は多大の苦痛を嘗めさせられてゐた。之が對策としては優れたる新路線を發見するの外ないので、調査は明治四十一年に始まり、第一回の調査復命書が

明治四十二年十一月中、技師辻太郎氏から鐵道院總裁後藤男爵宛に出されてゐる。その後幾たびか實地踏査が行はれ、初めは芦の湖線次は湯河原線、最後に熱海線と變轉し、四十四年中に選ばれたものが大體現在完成の路線となつてゐるやうである。これこそ本邦土木技術史上の一大偉績と稱へべきものであるが、併しその當時は賛否の議論頻りに行はれ、横山又次郎博士の如きは地質學上から強烈な反對を絶叫した。かねて交通難に悩んでゐた町民は不圖一策を案じ、丹那を潜ぐる墜道が火の危險を冒し、その上に工費莫大だといふならば、延長に於て僅少の増加あるも、全然危險のない、また工費の低廉なる伊東迂回線こそ、國家のために採るべき良計であらうと斷定し、町長大原坦氏及町書記上原重平氏を盟主として、或は町民大會を起し、或はパンフレットを發行し、田方郡長静岡縣知事等の聲援を得て鐵道省に乗込み、盛んに意のある所を陳辯嘆願する所があつた。結局勞多くして果を結ばずに終つたが、この事件を一契機として鐵道敷設に對する關心が深く町民の間に培はれたものである。今そのパンフレットを發見し得ぬことを大なる憾みとする。

第二節 後藤總裁から講釋を聞く

大正六年（二十一年以前）二月八日付を以て、鐵道院總裁宛伊東町長鈴木藤左衛門氏外沿道六町

村長連署の、熱海伊東間鐵道敷設請願書を呈出した。この紹介人は醫學博士北里柴三郎氏（後に男爵）であつた。

これより先、伊東町の風光を愛好してゐた北里博士は、大正二年五月玖須美の一角に土地を購入し、やがて宏壯なる別墅を營まれた。同博士は町發展策について常に懇切なる指導を與へられたが、その指導の大部分のまだ實現してゐないことを悔いるのみである。昭和六年同博士薨去の直後、下村龜太郎氏の發起で當町に追悼會を擧げ、次男善次郎博士北島多一博士等高名の門人數名出席され、町民多數會同して意義ある催しが行はれた。

博士は夙に國有鐵道敷設請願を勸説されたが、大正六年新春來東の際、特に親しく起草された請願書文案を鈴木町長に手交された。そこで冒頭記述の如き擧に出たのであつて、鈴木町長は町會議員若干を伴つて後藤總裁を共官邸に訪問し、北里博士説示の方寸を以て陳情したのである。時に總裁は色を作して曰く

諸君の意のある所は略々了解できるが、或は近時流行の鐵道運動の模倣なのだらう。今や當局は既設線中に幾多缺陷あることを發見し、これが改良に全力を集中し、熱海線大工事の如きもその一端である。然るに今捲き起つてゐる新線敷設運動といふものは、善くない煽動政治家

を背景とし、收支計算を無視したものが多いのだから、若しこれ等請願を囓呑みにすれば、鐵道經濟は破綻するの外ない。諸君も流行熱に罹つてはいけぬ。

かやうな高飛車の挨拶なので取りつく術もなかつた。退去して後一行は思もよらぬ鐵道政策の講釋を聞いたものと顔見合はせた。他日この一伍一什を北里博士に報告した處、博士は、それは後藤さんの悪い癖であつて別に君等を叱責した譯ではなからう。僕は近く伊東行を誘つてあるから、其の節伊東の土地に踏入つて僕の説明を聞くならば、こんな結構の土地に鐵道のかゝらぬは、不都合だと思つてくれるだらう。僕の説明の伏線には、君等の請願書が絶對的必要案件であると、豪傑笑をされた。

その數年前、熱海町（今の熱海市）に於いて後藤男に土地を献呈したことがあつたが、男はそこに別墅（今は久通宮家に歸屬）を營まれてゐたから、近くもあり夙に伊東町の風物を知つてをられたと思はる。その後大正八年秋、男が當町東京館の客となつた時、岡區の一角に於いて愛嬢のため幾百坪かの土地を購はれた。

第三節 鐵道事業に對する國策の推移

話は二三十年の昔に遡る。本邦鐵道事業に對する各政黨の政策には可なりの隔りがあつた。政

友會は夙に國有論を唱へ、また地方鐵道の普及を叫んだ。或はこれを黨勢擴張策だと罵るものもあり、或は鐵道當局がその大望を満足せんがため、その時代は政友會の積極主義に便乗したのだと臆測するものもあつた。その是非善悪は暫く措いて、國有論の具體化したのは明治三十二年（三十九年以前）二月九日星亨氏等が「鐵道國有に關する建議」を第十三議會に提出したことに始まる。明治三十九年（三十二年以前）一月西園寺内閣成立し、兩院の協賛を経たる鐵道國有法は同年三月三十一日公布されたが、これは本邦交通史に一エボツクを作つたものである。これより先、加藤外相は國有反對の意志を表示して辭職した。

官制の上では明治四十年四月鐵道作業局を廢して帝國鐵道廳を置き、更に明治四十一年十二月鐵道院となり、これが大正九年五月まで続く。鐵道院初代總裁は遲相後藤新平男の兼任、その後原敬（明治四四、八、三〇、内相兼任）、後藤男（大正元、一二、三一、遷相兼務）、床次竹二郎（大正二、二、二〇）仙石貢（大正三、四、一六）、添田壽一（大正四、九、三）、後藤男（大正五、一〇、九、内相兼任）、中村是公（大正七、四、二三）、床次（大正七、九、二九、内相兼任）、の諸氏が相次いで去來した。鐵道院の命數十一年六月の内、後藤男及同系中村氏が通算八年九月間主人公となつてゐたのだから、男の植付けた勢力の潜在は絶大で、それと共に鐵道好みの政友會との間に犬猿の隙を作つたのは止むを得ない。

大正七年九月成立した原内閣は宿年の持論を直に鐵道政策の上に具現し、先づ九年度以降十八年度に至る十箇年計劃を決定した。これは舊敷設法別表中の未着手線三千數百哩の建設事業である。かくて新政策の實行に便するため大正九年（十八年以前）五月、鐵道院を廢して新に内閣に鐵道省を置き、初代の大任として元川肇氏が任じた。

從來交通に恵まれなかつた津々浦々に於いては、かやうな鐵道政策の積極的發現を見ては、恰も旱天に八大龍王の來臨を仰ぐの思をなし、やがて鐵道敷設請願運動なるものが全國を風靡したのである。その頃東伊豆方面に於いては、渡邊氏等計劃の豆東鐵道が經濟界の波瀾に累せられて實現性を失つた折柄であつたので、然らば好し、われ等また人後に落ちさらんとの臍を固めて、請願運動に乗出すことになつたのである。

第四節 龐大なる伊豆循環鐵道の計畫

大正十年一月、政府は鐵道敷設法改正案を第四十四議會に提出した。その別表掲記する所は新建設線百四十九、三十箇年完成、總延長六千三百哩、正に當時の既設完成線と其長さを等しくする龐大なものなので、賛成反對兩論者とも唯だ啞然たるものがあつた。町には幸に後援者があつたから熱海―伊東―下田間が加へられることだけは豫期したが、豈に岡らんや豫想を超えて、そ

の上に、下田―松崎―湯ヶ島―大仁と全半島を一周し、總延長七十八哩に達する巨大な熱海大仁鐵道といふ名が、第六十一號として掲記された。何といふ果報であつたらう。

町有志は惑ふ所があつた。果報が近き將來に實現するであらうか、或はまた最終に廻されて三十年の長期を待望せねばならぬだらうかと。又當町には前から鐵道熱が昂まつてゐるものゝ、南方賀茂郡方面が直に興奮して來るであらうかとも疑はれた。一方豆東鐵道の側も未だ手を引いた譯ではないので、十年の前半は遂に形勢觀望の裡に目を送つたが、議會に於いては賛否兩論囂々たるものがあり、衆議院は通過したものゝ之が貴族院に回付されるや議論百出、さりとて國民的要望を無視して迄も否決するの勇氣なく、遂に握潰しの裡に議會を終へた。

その後小泉策太郎代議士の意見を聴いたところ、同氏は寧ろ豆東鐵道の側を鼓舞して一氣に民設を急ぐを是とし、自ら渡邊勝三郎氏と會見されたこともあつたが、同年秋に至り民設の當分行はれ難きことを知られたので、遂に同氏も、第六十一號線の速成請願に取かゝるならば掛つて見よと言はれた。町は直に鐵道委員を選定し、鈴木町長及委員は十一月中、あまり氣乗せざる賀茂郡町村長代表者數名と共に小泉代議士を訪ひ、次の議會に對する措置を豫定し、更に町委員は翌十一年一月上旬下田町に催されたる賀茂郡町村長會に出席して運動參加を求めた。

原首相は十年十一月不幸凶刃に仆れたが、高橋是清子代つて印綬を帯び、元田氏は依然として鐵相であつた。そして十一年一月再び敷設法改正案を第四十五議會に提出した。この時別表掲記の路線は百七十八となつてゐた。鐵道網に名を列せられた關係地方の有志者は改正案の通過を謀ると號して、全國的の速成同盟會を組織したが、町は所信あつて參加を拒んだ。併し半島からの代表者が上京した頃は、全國から押よせた陳情軍が到る處蜚集して熱心に活動してゐるを見、當地方の熱心が寧ろ低きを憂へたものである。

一月末、町は鐵道委員會、町會等を連續招集して運動方法及請願文陳情文等を起草し、先づ熱海伊東間十三哩を第一期、伊東下田間三十哩を第二期としてこれが速成を運動することとし、二月上旬多數上京したが、小泉代議士病臥中の故を以て松野鶴平代議士専ら斡旋に任せられ、その紹介の下に鐵道省、政黨本部貴衆兩院等に入出し、田方賀茂兩郡町村長連署の請願書の内、衆議院議長宛のものは小泉松野兩氏の紹介、貴族院議長宛のものは北里博士の紹介にて呈出した。それ等はいづれも理由ありとして採擇されたこと勿論である。尙ほ衆議院請願委員會に於いては紹介人小泉氏病中不參、松野氏地理不案内とあつて石井研二代議士が説明の勞を執られた。

二月三月の交、委員等が貴衆兩院の門を潜つた頃は敷設法改正案の危機であつて、所期議員に

面會するために數日を費した。この間北里博士及新庄直知子の紹介によりて元田鐵相、石丸次官、大村建設局長等に陳情することとなり、又江原素六先生紹介の下に、伊東町長鈴木藤左衛門外十何名とだけ記された唯一枚の異例の傍聽券を以て入場して、若槻氏の陪審法案反對演説を傍聽することが出來た。この演説は草稿なしで數時間に亘つて辯ぜられ、實に鋭鋒犀利なものとして、好評噴々たるものがあつた。また伊東祐弘子の紹介により研究會事務所に出頭して、青木信光子に陳情することを得た。

改正案は間もなく貴族院をも通過して他日公布されることになつた。

第五節 鐵道療養所は約束手形

大正十年の暮、鐵道省課長一行多數が當町松川沿ひの一別荘に來つて集團越年された。八田嘉明、十河信二、種田虎雄、丹治經三、太田圓三等諸氏で、囑託外人二名も同宿であつた。一行晝は小室大室連峰のハイキング、夜は園基トランプなどに興じてゐられ、偶々海豚の大漁を目撃し且また其珍味なるに驚かれたさうである。當町温泉の清冽なのは一行を歡ばしめ、東京鐵道局をしてこの地に療養所を設置させたいなど打語られたともいふ。十一年二月上旬突如鐵道省職員一行の土地視察あり、保健課長福富正男、東京鐵道病院院長栗本康勝、東大醫學部教授眞鍋嘉一郎等

の諸氏が先達格であつた。案内役の一人坂田六兵衛町議を目診して、眞鍋氏がその健康の將來に對する警告を與へられたのはその時のことである。町としては從來北里博士の教示に基き、健康者のみの保養地として永く郷土の風光を保全したいと念願してゐたので、療養所といふ名稱に驚いて、或は肺患者など送致されては一大事なりと憂慮した。併し一行から説示があり、謂れなき誤解も一掃して極力斡旋せんことを約した。

一行は三四ヶ所の候補地を選んで歸廳された。同じ二月中前節記述の如く鐵道運動のため、鈴木町長は委員を伴つて上京し、鐵道省に出頭したる處、福富課長からの依頼ありて、湯川區山岸の土地に關する一切の書類を町役場より取寄せて呈出し、選ばれたる區域内約七千坪の地籍買収斡旋を受命することゝなつた。同月末、貴族院應接室にて北里博士を介して石丸次官に面接し、鐵道敷設の陳情を了へたる後、同次官曰く願意は領會した、いづれ伊東に鐵道も出來ることであるから、そこに療養所を建てようと思ふ。係りの者からお頼みしてある筈だから敷地買収一切のことは善きやうに斡旋して貰ひたい。この時町長はじめ一行は鐵道建設の約束手形を贏ち得たかに歡喜した。敷地のことは北里博士としては全く初耳であり、候補地はいづれかと訊されたので、町長は持合せの地圖について指したところ、博士は膝を打つて寔に最好最適の土地だと激賞

され、且つ曰く僕は先年伊東町に土地を選ぶに際り、その山岸邊りを第一と観たものだ。併し温泉の分量に多少の疑惑があつたから、轉じて玖須美に選んだのであるが、諸君の多數が温泉は確實だといふなら、そこに越した良い土地は無いと附言された。

其敷地は同年三月末鐵道省の有に歸したが、豫定の療養所は實現しなかつた。併し石丸次官振出しの約束手形は決濟されて一部の土地は伊東驛構内に加はり、一部の土地は、そこに多數の客間を有する宏壯な鐵道職員集會所が建てられた。

第六節 大村建設局長來豆

大正十一年六月、改造の祟によつて高橋内閣總辭職、元田鐵相は敷設法改正を成就したゞけで新建設線の豫算化を實現するに至らずして去つたが、憾みは多かつたのであらう。加藤友三郎大將代つて首相に任じ、大木遠吉伯鐵相となる。

七月十日鈴木町長一行は北里博士の紹介によつて新鐵相を訪ひ陳情大に力める所あつた。間もなく建設局長大村鏞太郎、工事課長太田圓三氏等一行伊豆視察の豫報あり、事の順調に運ばれ來ることを多とした。鈴木町長の方法として陳情は單に口頭を以て足れりとしな。事毎に陳情書を呈出するのでなければ形迹が消えるといふのであつて文書を擔當する委員はいつも忙殺された。

大村局長を迎へるにも文書を要するとあつて、その時の標題には「大村局長を迎へて鐵道速成の熱望を陳ぶ」とあり、結句に於いて「今閣下親しく半島の山河を跋涉して踏査に勞せらる、寔に萬謝の極なり。必ずや沿道百般の實狀と民衆熾烈の熱望とを洞察したまふて餘すなかるべし。翼はくは英斷以て地方開發のために一臂の御努力を吝まれたまはざらんことを」とあつた。

局長一行は七月二十四日東京發、湯ヶ島、下田を経て廿六日來町一泊の上、歸廳された。

第七節 小泉代議士の心機一轉

當町の有志者が小泉代議士に鐵道運動の話を持出した初めの頃は、單に選舉區の人間だと觀たゞけで義理一片の挨拶しかされなかつた。九年秋の政治季節に伊豆線を政府の鐵道網に加へて貰つたり、十一年の二月請願書を衆議院議長に紹介して貰つたりしたとはいふものゝ、政友會に於ける同氏の位地からすれば僅に一舉手の勞にしか過ぎなかつた。同氏曰く元田鐵相の大鐵道計畫といふものが自體俺には出鱈目としか受取れぬ。それに伊豆半島循環鐵道七十八哩の長きを建設するといふのも正氣の沙汰とは思へない。そんな夢に似て實現性の乏しい運動に浮身を窶すことよりも、あの豆東鐵道會社に活を入れて熱海伊東間だけを速成するが上策であらう。その後になつてこの民設鐵道を政府に押賣りする段になると、俺が屹度成就させてやらうと。町有志は之を

聞いて冷たい議論だと憤慨した。

町有志としては實は功利的でもあつた。選挙してやつたのだから極力その政治的力量を利用してやらうといふやうに、初めは小泉氏の超越せる人格など味覺してはゐなかつた。同氏が政界人であり經濟人であるのみならず、漢籍佛典に通じ、美術を愛好し、達識絶倫であることを知つたのは時経た後日のことである。ある時は同氏から離脱することすら考へたので、去つて岩崎動代議士を訪問した。同氏は例によつて愛想よく款待してくれた。同氏曰く諸君が伊豆の地盤を僕に提供したいといふ好意は萬謝するが、駿東郡が僕を手放さない。僕としては小泉君以上に伊豆をも知つてゐるから、前年既に伊東熱海間及伊東沼津間の民設鐵道を出願した程である。それが渡邊勝三郎氏の豆東鐵道と競願になつたから僕の方で讓歩した經歷は諸君の知る通りである。小泉君が政府の鐵道計畫を攻撃するといふのは、要するに認識の不足だ。僕から更めて研究するやうに忠告もしよう。今つらく政界を見渡すと同君位の偉大さを有つてゐる人は少く、僕の常に兄事してゐる所である。たゞあまり盡す所が缺點であらうが、あの干鯛も嚙んでゐるうちに味が出てくる。小泉君は言はゞその干鯛なのだから諸君も味の出るまで嚙んでゐることだねと。

時経て大正十一年十一月七日、麻布の小泉邸に鈴木町長と上原町議とがお客になつた。晚餐の

席に現はれたのが主人公の外に岩崎代議士と太田工事課長とであつた。

これより先、小泉氏は遂に鐵道問題を検討するの意を決し、幾たびか太田課長を自宅に聘し、大部の参考書類を齎らさしめて、國鐵の現在と將來、諸外國との比較などに關し、根柢り葉柢り質疑した事實がある。

當夜同氏曰く俺は太田君を先生として頼んで一かどの鐵道通になつた。併し要するに俺は芝居ならば奈落の底に隠れて廻り舞臺の轆轤を廻す蔭の役しかできぬ男だ。之に反して岩崎君は檜舞臺の上でシテ(主人役)を勤める名優なんだ。そして差あたり太田君を作者と見立てよう。かう三足揃つたからには、伊豆に汽笛の鳴るのはあまり遠い沙汰でもあるまいではないかと。

町長等は辭して靈岸島寶屋旅館に待機してゐた田方賀茂二郡の有志者等に首尾を語り、一同は小泉氏の心機一轉を只管喜んだが、之と同時に地方有志の小泉氏に關する認識も好轉して行つた。翌十一月八日一行は小泉氏に伴はれて大木鐵相を訪問したが、鐵相は鐵道網の地圖を擴げてこゝだねと指しつゝ、小泉氏の陳述を聞いた。一委員は語を挿み、熱海下田間だけなりとも第一期線として御採擇下さらば満足いたしますといふと、鐵相は行詰りは意味がないだらうとあつた。時に小泉氏は黙つてゐなさいと委員を叱して意氣軒昂たるものがあつた。

第八節 元田前鐵相伊東にて越年

大正十一年(十六年以前)十二月二十一日眞鶴驛開業に伴ひ同地と當町の間に一日二回の新航路が始まつた。その頃元田前鐵相は離黨してゐたが、戻るとか戻らぬとか政界雀の評語區々たるものがあり、それを煩はしとして同氏は十二月大晦日漂然東京を立ち、眞鶴港から新航路を経て當町に着いて、猪戸の山田屋旅館(松喜の前身)に納まつた。寒がり屋の同氏は防寒設備の不十分であつた當時の旅館を攻撃して止まなかつたが、素朴な點を喜ばれて二十日あまり逗留された。町有志は屢々面謁して或は近郊に誘ひ、或は圍碁(對手は主として下村龜太郎氏)に連なりつゝ、その間鐵道敷設法改正前後の苦心談やら、伊豆線の將來など打明けた抱負を承るの榮を得た。

ある時曰く、鐵道の功德は測り知れぬものがある、僕は就職後間もなく上越北線宮内東小千谷間開通式に臨んだが、近郷數里から來たといふ地方有志者が沿道に土下座して迎へてくれたのは恐縮したものだ。さもあらうといふのは例へば米の如き昔から馬背により險阻を越えて一駄何圓と高額運賃を費してゐたのを、今後は自家用手押車で驛まで運び得られるといふ現前の實物教訓にあづかつたのだから、有がたかるのも無理でないと思つた。こんな譯なのだから敷設運動といふのは物すごく、草鞋がけで百人づゝも上京して來るのは珍しくない。これに較べると伊豆

の人の熱心はまだ／＼足りぬ所があると。

當時當町の越年客の中、伊東子爵は榊屋裏の別墅に、小橋一太氏は北里第二別邸に、伊藤大八氏は櫻屋旅館にあり、別に某々地には何の誰ありと聞いたので、町有志としては當町に名士集談會のやうなものを偶發させてみたいといふことゝなり、中村長五郎翁が自ら奔走して一月五日長岡からは床次竹二郎、湯地幸平、大塚唯男氏等を、六日修善寺からは野田卯太郎、榊田清兵衛氏等を迎へ來り、榊屋旅館にて所期の通り名士集談の目的を達し、同日伊東子別荘前庭にて紀念撮影をなしたものが即ち本冊子巻頭のそれであつた。野田大槐氏揮毫の中には例の「蘭かざる憚りながら日本種」もあり、即吟の「伊豆の春こゝにも欲しき鐵道かな」及「巡環の汽車に觀にけり伊豆の蘭」は請はれて幾枚もできた。その名士の方々は速成運動をもつと猛烈にするがよいと示唆される所あり、一行に加つた久留義郷氏は鐵道監察官の閑歷者、榊屋に泊り合はせた早川徳次氏は地下鐵の創建者である關係から、殊に激勵に力められた。

因にそれから二三年の後、當町は上水道布設許可の申請をした處、内務省財務課に於いて一大難關に逢着したが、課長田中廣太郎氏は元田氏の女婿として、豫ねて伊東人の醇良を傳聞してをるなど語られ、好意を以て難關を通過させてくれ、昭和六年末同氏が本縣知事たるに及び、因縁

浅からず、東豆地方開発に努力される所極めて多大なるものがあつた。

第九節 石丸次官の口約

元田氏は大鐵道網の計畫者として功績多大なるものがあるが、之を實行に移すことの幸運は大木新鐵相の手に歸した。その當時伊豆鐵道の運動は爾餘のいづれに比しても手後れであつたものゝ、漫然として第一期事業に加はり得ると豫期したのはチト過が良すぎた。やがて十一年十二月末に開かれた新敷設法による第一回鐵道會議に附議されたものは大正十二年度以降二十二年度に至る十一箇年計劃新設二十八線延長八百四十二哩工事費一億七千萬圓といふ大規模であつたが、不幸にも伊豆線の名が載つてをらぬ。加之、年次表を通覽すれば、既定十箇年及新規十一箇年計畫のため、年々八九千萬圓の公債財源も十八年度まではその全額を消盡し、餘利の初めて生れるのは漸く十九年度以降であり、その以前には一線たりとも割込餘地のない經理方法と見られた。こゝに於いてか獨り伊豆線といはず、取殘された百五十線關係地方の憂虞動搖は著しいものがあつた。故にわが同志は次節記述の如き請願運動に熱中すると共に前記の重大なる疑惑を解くべく、先づ小泉代議士に繩つた。大正十二年春第四十六議會の進行中、小泉氏は友人木下謙次郎氏に囑して石丸次官に訊す所あつたが、その報告として、次官曰く議會が金さへ吝まなければ當局は多々

ます／＼辨するのであるが、いま政友會は多數黨だなど誇負しながらも、反對黨や貴族院の攻撃に面すると、直ぐに萎縮して手も足も出ぬではないか。鐵道の急務を理解してくれるならばモツト勇敢に構へて貰ひたい。所詮小泉君などの經濟人は公債の増加を嫌ふ第一人者でもあらうと。そこで小泉氏は石丸は俺を見損つてをるわいと感じたとかで、役所訪問大嫌なのに、重い足を石丸次官の室に運ぶ段取となつた。

所が例令政府といふ大權威の施設だからとて工事能率や施工經濟などを無視し、六七年間は既定線の工作だけで安閑と日を送りつゝ、急に十九年度から各方面一齊に新工事を急ぐといふのは暴舉に近い。又長期の年次表といふものは一種の目安で、その遂行に臨んでは思ひ設けぬ障礙もあるだらうし、年々豫算一杯の完全消費などは實例にない所である。自然一線／＼と竣成する毎に、また不可避的事由で繰延などある毎に、その資源の餘裕に乗じて新々線割込の機會は幾らもある。元來當局は漫然として百七十八線を描いた譯でなく、他の何人にも越えて各新線の急務なることを熟知するのだから、空しく拱手して十九年度の遠い將來にのみ囑望するものでない。——以上は石丸次官談話の大要であり、加之、伊豆線の擡頭は再來年十四年度とするから、靜に待たれたいと確約された事實は公然の祕密であつた。なほ一方衆議院に於ては大木鐵相が十四年

度には若干の新線を期してゐると、ウツカリ口を迂らしたことは、無論伊豆線のみを指した譯ではないが、鐵相の肚裏判明すとか何とか時事新報その他に大書された。

第十節 伊豆は國防上の重要地點

大正十二年初春匆々、今度こそは拔擢の功名をなして、從來の手後れを取返すべく馬力を掛けた。貴衆兩院議長宛の請願書には沿線地方七百五十九名の調印を見たが、これは併し時日と手數とに大なる努力を費した。期成同盟會長たる鈴木伊東町長、同副會長金澤下田町長は各々自郡下の代表者を率ゐて靈岸島寶屋旅館に屯し、二月上旬先づ衆議院方面に向つたところ、岩崎代議士は連判帳を一瞥して之は不合格と宣せられたので狼狽した。要するに七百餘名の生年月日と職業とが闕けてゐた。併し各町村を再巡歴する違もないので、在京中の伊東町長鈴木藤左衛門外町村長二十數名(町村長は職名のみで足り生年月不要)の連印と改め、かくして兩院に對する手續を了したが、後日いづれも其請願は採擇された。

別に小泉氏は速成建議案を衆議院に提出した。ある日同氏は進行係たる岩崎政友會幹事長を自宅に聘し、僕の建議案は下屋住み(併託の意)を好まぬから獨立の委員會を作つてくれと囑した。三月も半頃になると各種委員會が午前午後通じて開會され、政府委員や速記係は引張風である。小

泉氏は復び岩崎氏を呼び、僕はこれ／＼の日は東京に居らぬから、是非十五日に委員會を開いて貰ひたいと話す。岩崎氏は手帖を繰つて十五日はかく／＼で不可能だと答へたところ、例の氣性なのだから斷然押切つて十五日と決定せしめた。

傍聽券を握つても委員會室には入場を許さぬ。僅に二三の同志は廊下廊となつて空氣だけなりと觸れようとした。小泉氏は珍らしく洋服で森格代議士と連れだつて入場、委員長席に納まり、森氏は給仕を遣して山梨陸相、石丸次官等の出席を促した。次官は遂に見えず八田建設局長が代辯した。當時の委員會速記録中から小泉委員長の間對する陸相の答辯を左に轉記しよう。

山梨國務大臣 この東京灣要塞は或物を掩護するといふこと、東京に入る灣口を閉鎖するといふことの二つの目的を有つてをる要塞であります。この要塞の設備が目下のところでは非常に古くなつてをります。當今の海軍の大砲が遠距離を撃ち得るやうになりましたは、假令東京灣の灣口を閉鎖し得るとしても、ある物體を掩護するといふ方に於いて缺くる所が出来たのであります。それがために兎に角要塞の第一線は前方に進めなければならぬ、斯ういふことになつて居る次第であります。これは華府會議の結果等には關聯して居りませぬ。要するに要塞即ち砲臺そのものを置くや否やといふことは、是は言明する限りのものでもなからうと思ひますが、要するに東京灣口の要塞の關係をこの伊豆の地が有つて居るといふことは

是は明瞭な事と思ひます。果して此所に砲臺を築くとか、築かぬとか云ふことは言明を要せぬこと、思ひますが、防禦そのものには著しき關係を有つてゐる、即ち色々な設備の一部分が施されるといふことは、私が確實に此所で言明し得るのであります。この交通の發達し居るや否やといふことは、これに大關係を有つこと、斯う信ずるのであります。

かやうに東京灣防備と伊豆との重大な關係について陸相の言明があつたので、これが爲めに鐵道省當局を動かしたことは著しかつた。即ち陸相を委員會に誘致したことは大成功となつたものである。委員會通過後、三月廿一日の本會議もまた滿場異議なく通過したことは勿論であつた。猶ほ石井研二氏はこの委員に列して居られた。委員會速記録は小泉氏から一千部を寄贈せられ、期成同盟會長鈴木町長及副會長金澤町長の名を以て關係町村へそれ〴〵配布したが、この時小泉氏から當町太田氏に寄せられる書翰を左に記載しよう。(巻頭寫眞参照)

拜啓 先日御内報申上候拙宅の小集は、生憎大木鐵相病氣缺席され候得共、石丸君は見えられ高橋、野田、床次君などにて深夜まで暢談いたし候。石丸君は其明、わざ〴〵禮に來られ候。近日更に大木君の爲に一會相催し可申候。扱かねて御所望の委員會速記録出來候に付、活版所にまわして印刷を命じ候。鐵道敷設法案全體の説明と小生の伊豆鐵道に關する意見とを起稿して小冊子を作る考へなりしも、小生責任を

以てする冊子となれば相當の調査研究が必要となりて急のまに合ふまじくと存じ、委員會速記だけに止め、意見書は他日に譲り候。從て右の速記録は何程御入用なるや、又は之を刊行するとして出版責任者を何人とすべきや、(町村長等の期成同盟會成立しあらば、其會の出版とすべし)印刷物はどちらへ送るべきや、御回報被下度候。來二十九日静岡に東海十一州大會あり、本部より總裁及床次君出席に候。小生は此種の會合に出るがうるさき故、不參と存じ候へ共、諸君御出かけにも候はゞ御つき合ひ可致候。草々頓首

七月六日

三 申

太田老兄侍史

尙ほ鈴木町長の謝狀に對する森恪氏の返翰は左の通り。(巻頭寫眞参照)

拜復益々御清穆之段奉慶賀候。扱て四十六議會に於て、伊豆循環鐵道建議に關し職責上携はり候件に對し、適當の御挨拶狀に接し恐縮に奉存候。右御希望御實現には猶前途に幾多の關門有之べく、御必要の場合には、今後共微力ながら御手傳可申上候。御狀に不取敢御應へ申上候 敬具

大正十二年五月十五日

森 恪

伊豆循環鐵道期成同盟會長 鈴木藤左衛門殿 侍史

第十一節 上原參謀總長の一喝

上原參謀總長

大正十二年四月、田方賀茂二郡代表者は參謀總長上原勇作大將を訪ふて、臆面もなく鐵道速成援助方の陳情をした。

前節記述の如く山梨陸相は衆議院の委員會に於いて伊豆の國防上に於ける重要性を語り、小泉代議士は然らば軍部に於いても鐵道の速進を謀らねば、といふ質疑應答があつたことに氣を善くした有志者は、伊東に病を養はれてゐた元の青島軍司令官神尾大將の紹介狀を得て、參謀本部に出頭したのである。副官大尉に導かれて大きな應接室に入り、茶菓や煙草の接待にあづかつて居るうちに、總長は堂々たる英姿を現はされた。代表者等は多年伊豆鐵道敷設の運動に従事したる旨を前提として、半島の國防上の位置に顧みて軍部に於かれても御後援を願ひたしと、恐る／＼陳辯したところ、總長は先づ一聲、君等は參謀總長に向つて國防の講釋をするのかと大喝されたので、たれ一人面を上げ得るものがなかつたが、松崎町長依田四郎氏の助船があつて後、總長言を次いで曰く軍部の交通改善に期待する處は非常に大きい。兵員物資の動員の如きは、交通の良否如何によつて効果に著しい差等がある。改正の鐵道敷設法では鐵道大臣が鐵道會議の議長となるが、改正前の同法では參謀總長が議長に任じたことに見ても、如何に軍部が鐵道に關心を有つてゐるか判るであらう。だから軍部は有らゆる路線について熱心に之が速成を希望する。

豈に敢へて伊豆線のみであらうかと。次いで一層語を軟げて小田原輕便鐵道の状態、熱海以南の交通如何等の問答が取交はされたので、代表者たちは漸く浮ぶ瀬のある思をなし、一步外庭を踏んで初めて息吹ることが出来た。

爾來兩三年、大將閑職に在り。偶々西園寺公を興津に見舞はれる途次、當時の一大代表者は同車の光榮に浴し、前年の不躰を謝したところ、意外にも鮮かに往時を追憶せられ、さて鐵道運動のその後は如何など問はれたので、反つて恐縮したのであつた。なほ同車中の庄司良朗代議士が、日露戰役當時大將の部下たりし懷舊談を持出したところ、非常に悦に入られたのであつた。

第十二節 丹那隧道は伊豆線可能不可能の分岐點

森恪代議士には莫大なる御厄介をかけてゐる。速成建議委員會の理事にも任じ、それが本會議に上程された時は小泉委員長代理として濼瀨たる報告演説を行はれた。ある時曰く、諸君は伊豆鐵道可能不可能の分岐點がどこか知つてゐるか。答へて曰く、存知いたしません。曰く何といふ迂濶なのか。抑も東海道線は箱根足柄の險を走り、その能率の上らぬことは著しい。併しこの險阻に沿ふて改良工事を施行することは全く無意味なのだから、之に代はる新線を布きたいといふのは技術者間の懸案であつた。大正の初め後藤新平總裁が部下の提案を容れて熱海線改良とい

ふ大工事に断然着手されたのである。然るに大正七年九月、原内閣が成立するや、政友會宿年の鐵道政策として既に存在する所のものは多少の不備を忍ぶが可い、未だ無き所へは普く敷設してやらう、即ち建設を第一とし改良を第二とする所謂建主改従であつて、之がために特に鐵道大臣の一椅子すら増置することとした。この主義から観ると一局部に一億圓を費すといふ熱海線の如きは忌避されるのが當然の成行で、あれは後藤さんの一私案だなど誤解して誹謗するものすらあつた。僕は豫ねて友人の太田工事課長から技術上の説明を聽いてゐたので、國策上眞に止むを得ざる工事であることを知つてゐたし、一方神奈川縣南部を地盤とする關係から、熱海線が双葉のうちに踏みこまれることを憤慨した。依つてその中止又は繰延の謂れなき所以を極力原首相に進言したが、僕の背後には隠れたる推進力として技術者の集團はあつたものゝ、黨の中では文字通りの無援孤立で四面楚歌の裡に呻吟した。併し最後には僕の至誠が首相を動かして漸く運命を繋ぎ留めたのであつた。熱海線といふと直ぐに三浦觀樹將軍の名を熱海の人たちは持出すが、も少し眼を開いて貰ひたいものだ。

次に曰くさて伊豆鐵道のことになるが、其起點が國府津驛だと何とするか。その南、小田原熱海間が最大の難所であるから、この天下の嶮を超えてまでも僅か伊豆一國のために誰が鐵道を計

畫してくれようぞ。之に反し起點が熱海だとすると茲に初めて伊豆線敷設の可能性が見出されるだらう。依つて諸君もまた丹那隧道の功德を謳歌すべきである。

この小話のうちにも森氏の利かぬ氣性を瞥見されるのだが、同時に熱海線の運命に關する一秘話として傳ふべき價值があるだらう。

第十三節 鐵道は人の頭から頭へ

同じ頃、岩崎勳氏曰く、諸君から伊豆のお國自慢を聽くのは久しいが、凡そ必要といふことだけを唯一の理由として鐵道が掛かると思つてをられるか。見たまへ敷設法別表百七十八線いづれか是れ不必要の路線であらう。そこで遂に前後の争に歸するのだが、さて政府の説明書を繕くと鹿兒島指宿間二十六哩、これは薩南の小さい温泉に行く線であり、仙臺山形間四十哩、これは中央山脈の面白山を難行する線であつて、いづれも其一哩當りの工事費は伊豆線の二倍である。伊東温泉の將來は決して指宿温泉どころであるまいし、伊豆海陸の乗客物資は仙山線に數倍すると思はれる。然らば工費が多く必要程度の低い此等の鐵道が優先的に第一期線として計上され、工費が少く必要程度の高い伊豆線が何時計上されるか豫想できぬといふ理由抑も如何。篤と考へて見ることだね。では秘中の秘といふ密話を授けよう、凡そ鐵道といふものは必要といふだけの理

山で、甲地から乙地に掛けられるものではなく、所詮は甲といふ人間の頭から、乙といふ人間の頭に向けて掛けられるものだといふことだと。談り畢つて呵々大笑された。流石は一大政黨の幹事長として、言外に意を籠めた抜け目のない煽動ぶりであつたが、顧みればこの時暗示された如き風潮は、過去に於いて確に存在したものである。

第十四節 第二期新線に再び落選

大正十四年十二月二十四日の新聞紙は第二回鐵道會議に於いて可決した新建設線の名を掲げたが、待望の伊豆線はその中に見出せなかつた。

是より先、十二年八月末加藤友三郎大將病氣危篤のため辭職し、山本權兵衛大將代つて首相の印綬を帯びた。九月二日成立したこの内閣は所謂地震内閣で、復興豫算だけは成立を見たが、歳晚通常議會開會式當日に惹起した虎の門不祥事件の責を引き、年を越えて十三年一月七日清浦至吾子が代つて内閣の首班となつた。當時第二護憲運動なるもの勃興し、小泉代議士が總參謀長として獅子奮迅の働きをしたことは、伊豆人の記憶に殊に鮮かなるものがある。清浦内閣は遂に退却の外なく、十三年六月十一日代つて加藤高明子が三派内閣なるものを組織した。山本内閣の鐵相山之内一次氏、清浦内閣の鐵相小松謙次郎氏とも、政府が復興事業に全力を傾注した際のこと

ゝて、鐵道事業の縮小を甘諾せざる譯には行かなかつた。加藤内閣の鐵相仙石貢氏も亦然るものがあつた。時世が時世であつたので嘗て石丸次官が口約した伊豆線の十四年度擡頭といふが如きも、御破算當然として諦めざるを得なかつたし、運動も中絶した。

然るに第一回會議より三年を距てたる十四年十二月、第二回鐵道會議が開かれてそれに附議されたのが、削除一線、繰上十二線、新線四線であり、混亂裡に一線否決、結局新線三となつたが、會議の不始末のため仙石鐵相引責辭職の噂さへも生れた。それは兎に角伊豆線は逸脱した。石丸次官の口約はどうなつたかといふ騒ぎで、廿四日朝町役場には十数名の愛町者が詰め寄せた。強硬論の急先鋒下村君に押出されて、無駄にもなるまい後の伏線にはなるだらうとて、上京の途に就いたのが、上原、大沼、太田の三町議であつた。

その行先は例の小泉邸より外にない。主人曰く今更故人になつた石丸君を責めても始まらぬ、恨むなら地震を起した大鯨といふ邊だらう。時節柄でもあり仙石君は新線をやらぬと聞いてゐたし、俺は面識のない同君を訪ねるのが憚りから傍觀してゐたのだが、同君も側から攻められて遂に緊縮の一角を崩されたといふ仕儀なのだらう。なほこの事について省議が決定したといふ十日ばかり前に降旗君（政務次官）が見えて切りに言譯がましい話もあつたが、止めてくれ、三本でも

五本でも新線を出さうとしたことが緊縮内閣としては寧ろ上出来だと讃めておいた。まあ、今度の新線を皮切として次から次と續々新線が現はれるだらう。さもなければお味方黨が納まるまいではないか。この次は伊豆の番だ、降旗君もこの點だけはハッキリしてゐた。永いことはない僅か一年の辛抱だ。——以上が小泉氏の談話であつた。

夜に入つて三者は黒田重兵衛代議士を神田橋の今城旅館に訪問した。同氏も伊豆線の落選を憂へ、然らば明日は相共に降旗政務次官を訪ねて遺憾の意を述べようと約された。

顧みればその前年の三月、小泉氏の選挙應援として田方郡の演説會に臨まれたのが、政友會の横田千之助、憲政會の降旗元太郎、鈴木富士彌、革新の古島一雄氏等の三派聯合軍であつた。伊豆の憲政會は極力黒田氏の出馬を求めたるに係らず、同氏の應諾なきがために、連日苦慮してゐた折柄とて、降旗氏は地方黨員と共に黒田氏を強要し、遂に所期の目的を達するを得た。その勸説者は鐵道政務次官となり、黒田氏の擔へる地方問題は即ち伊豆鐵道であるのだから、謹嚴そのものゝ同氏が鐵道問題に限つては、政務次官の前で駄々を捏ねたに違ひない。

明けて二十六日は第五十一議會開院式當日であつたが、それにも係らず黒田氏は當町の三者を率ゐて鐵道省に局課長を歴問して陳情に努められ、午後に入るや約に従つて登壇されたる降旗政

務次官に面會して、鐵道會議の内容、伊豆線の擡頭困難の事情等を訊し、大に將來を懇望される所があつた。

第十五節 衆議院に於ける第二次の建議

曆は新まつて大正十五年春、田方賀茂二郡の結束を一層強化し、第五十一議會の開會中を期して、従來の後援者や關係當局者を片端から歴訪して陳情した。伊東祐弘子は諸君が運動を中絶したのは迂濶であつたと警告されたが、有志者たちは震災復興事業のため公債財源も餘裕の無いのを推斷し、新線到底不可能と諦めた旨を述べたところ、伊東子曰く、そんな遠慮が善くなかつた。鐵道當局の興味は一つに係つて新線新々線の上に存し、財源に少しの間隙でもあれば新線建設の餘地を看過しない。今後運動中斷は禁物であると。

この時の行動に關しては上原伊東町議及鈴木下田町長の報告書がある。いま鈴木氏の記述を雑誌「黒船」第三年四月號から左に抜摘しよう。

「大正十四年十二月末、突然新建設線が決定されたが、新聞紙の傳へる所、候補線であつた熱海下田間が遂に洩れたとあつた。この發表は電光石火的であつた爲め、何等手段を講ずる餘地もなかつた。賀茂郡の期成同盟會支部は十五年一月委員五名を伊東町に送り同町に越年せる鐵

道省建設局及經理局の一行を旅館に訪ねて將來の配慮を懇望し、また伊東町の諸氏と諒解を遂げたので、本郡委員七名は伊東町委員數名と相伍して二月三日上京して手配にかゝつた。

例によつてまた、貴族院議長には速成請願書を提出し、衆議院に對しては政民聯合(小泉、岩崎、松本、黒田、三橋、山本の六氏)の建議案を提出することとなり、いづれも通過したのは幸福であつた。當時面謁したる諸公等談話の若干を次に記述する。

黒田代議士

衆議院に於て各種の建議案を附議するのは概して閉會間際であり、以前は知らず當今は建議案なるものが一般に議員のお土産案に墮して來て、あまり權威がないやうだ。然し爲すは爲さざるに優ること萬々であり、地方民衆の熱望を公表する機會ともなるから、小泉君と打合せて諸君の意に副ふことゝしよう。

小泉代議士

初め我輩は賀茂郡の如き僻障地にまで鐵道の布かれることは六ヶしいと思つたかし、元來口先きで人を歡ばすことの大嫌いな性質だから、鐵道のこととは從來あまり口に出さなかつた。その後いろ／＼調べて見ると敢へて布けぬことは無いといふ確信に達した。そこで自己の郷里に布く鐵道を露骨に話し廻るのは腹の痛む次第ではあるものゝ、小にしては伊豆の開發、大にしては國家の利福といふことにもなり、我輩當然の責務として其實現に努力する決心である。まあ諸君に於ても不斷の活動が肝要だと。

そこで降旗政務次官に紹介の勞を執られた。

降旗政務次官

諸君の熱望せる熱海下田線も候補に上つたが、最後に至つて洩れたのは遺憾であつた。洩れた理由は外でもない、要するに國家の財政上から來た關係であつた。今後我輩も盡力するから諸君も熱心に陣情を續くべきである。詳細は八田君と話し合ふが可いと。かくて紹介を賜はつた。

八田建設局長

熱海下田線の速成急務は當局も十分に認めてゐる。それを繰上げ新線として一度は候補に上せたことは大體新聞紙所報の通りで、それによつても當局の態度は判るだらう。然らば採擇に洩れた内容如何といふに、これは他の線に比して哩當りの工費が多額であり、その中伊東下田間は普通程度だが、熱海伊東間が莫大である。先づ通じて哩當り二十九萬圓となり、第一期として探らうとする熱海下田間延長三十六哩分では少からぬ工事費である。かやうに一線だけで工事費過大であるのだから、財政の按排上後廻しとなつたことはお氣の毒である。併しその内には諸君が破顔微笑する時期も必ず來ようから、今後も奮闘努力されたが可いと。

(其他省略)

この時の運動の結果は當局にお氣の毒／＼を連發させた形であつて、將來の必ずや恃むべからざるにあらざる點に、少なからざる期待をかけた。

第十六節 豆南の海南に宰相を迎ふ

大正十五年の晩春、わが海軍のブライド軽巡洋艦古鷹號竣工、その試運転が横須賀下田兩港間に行はれ、これに便乗されたのが若槻首相はじめ閣僚五七名であつた。わが半島の代表者はこれを好機として鐵道速成陳情を行ふこととなり、賀茂郡は鈴木下田町長外全町村長。田方郡は太田伊東町長、森田宇佐美村長の外、上原、大沼、稻葉幾（現町長）三委員は五月二日打揃ふて下田埠頭に待ち構へた。正午古鷹は外港に投錨、高官の一行は上陸後直ちに自動車を聯ねて竹麻村の海軍病院を訪ひ、中食後院内巡覽、了つて前庭廣場に於て衆庶歓迎の誠意を受けられた。伊豆循環鐵道期成同盟會長鈴木下田町長は、若槻首相に一揖して朗々陳情書を讀み上げ、並居る諸顯官にも等しく至誠を示すの光榮を得た。

陳情書の末尾に書して曰く、惟ふに一國の宰相を首班とする高位高官多數の一團を歓迎し、從來幕末外交史と、稀有の海軍病院との外に知らるゝもの少きわが豆南僻陬の海角に於て、民衆の至誠を發露する好機會に恵まれたることは、全く空前絶後の一奇蹟と謂ふべくして、その光榮辭の能く及ぼさる所に候。幸に閣下並に諸顯官の御炯眼、直ちに半島開發の對策如何と御洞見したまふあらんか、鐵道に關する拙者共熱望の、決して怪訝ならざるを御認識下さるに難かるべく

候、云々。

折から初夏の輝かしい陽光は南國情緒を碧海綠樹の上に漾はし、顯官の方々三々五々、海濱に歩を移された。財部海相は安達内相を顧みて風光の美と土地選定の功とを誇り、駐劄の一醫官は古鷹乗員たる一士官と相携へて生活の不便を啣つてゐた。曰くこの土地は往年海相が横濱長官時代に選定されたのであるが、下田まで鐵道の布かれることを豫期されたからださうである。故に駐劄の諸官は鐵道實現の日を鶴首待望すると。洩れ聞いたわが同志は實に感慨無量であつた。

第十七節 海南蘇峰兩文豪の半島周遊

サブライムな風光、デリケートな温泉、それは天の成せる惠澤であり實に半島の誇りである。唯だ訪ひ來る都人士の少きは交通不便に禍されるためである。大正十五年度から東は伊東稻取間西は仁科船原間の自動車道路が改築に着手され、幾年かの後には辛うじて全海岸一周の陸路を貫き得べきであつたが、半島民は單にそれだけで満足しない。灼熱的の待望は伊豆鐵道の實現であつたのだが、たゞ力足らずして宣傳の良策のないのを憾みとした。然るに偶々東京朝日及國民の二大新聞に連載された伊豆の旅行記二篇は實に宣傳効果百パーセントであつた。

即ち十五年七月、時を同ふして下村海南、徳富蘇峰の二大文豪が伊豆周遊の擧に出られ、海南

先生は石井光次郎、霜山經助二氏を、蘇峰先生は令夫人及高橋源一郎氏を夫々伴はれたが、前者の紀行は「伊豆めぐり」の題下に七月二十一日以降二十回に亘つて東京朝日に、後者のそれは「伊豆遊記」の題下に八月五日から十八回に亘つて國民に連載された。伊東循環鐵道期成同盟會は兩先生の許可を忝ふして、如上二旅行記を姉妹篇として印行し、數千部を官憲及半島人士の間に頒布した。因に蘇峰先生は小泉氏の誘引に基くものであつて、熱海伊東下田までは中村長五部翁、下田より先は鈴木信一氏(後に静岡縣議)が夫々東道の勞を執られた。

同盟會印行の冊子に附したる小引は次の通り。

大正十五年の夏、一流の新聞記者を續けさまに迎へ得たことは、誠に半島の光榮であつた。朝日新聞海南先生一行は、七月二十四日三島から中豆を経て西海岸に出で、土肥、松崎、下田、白濱、伊東、熱海を巡遊され、國民新聞蘇峰先生一行は、七月二十六日熱海から東まわりの道を選び、伊東から修善寺、それより天城越えに谷津に出で、下田、子浦、土肥へと遍歴された。行旅を異にした兩先生が二十七日谷津温泉で邂逅されたのは奇遇ともいふべく、その後間もなく新聞紙上に載せられた二旅行記は、半島民に大なる衝動を與へ、將來の鐵道速成運動に少なからぬ自信を鼓吹した觀がある。二つの旅行記にはそれ／＼の特徵を有し、海南先生のは瀟灑輕妙のうちに犀利なる經綸を藏し、蘇峰先生のは剛健莊重のうちに溫藉たる

情趣を溢らしてゐる。たゞ半島の風物を嘆稱さるゝ點に於いて二者全く揆を一にした。もとより兩先生とも飄忽匆忙裡の執筆に係り、他日補修の上印行されるのではあらうが、われ等は其日を待遠しとし、強いて兩先生の認諾を懇請し、こゝに半島旅行の冊子二部を姉妹篇として編纂し、鐵道期成同盟會から緣故者に頒つことゝした。われ等はこの機會に臨み半島民衆と共に、兩先生に重ねて深厚の敬意を表す。

第十八節 伊豆線の一部漸く決定す

十五年六月、仙石、降旗二氏の辭職により、代つて井上匡四郎子鐵相に、佐竹三五氏同政務次官に任ぜられた。井上鐵相は貴族院研究會代表として認められ、やがて新鐵相によつて鐵道新線は續々登場するであらうと噂された。

十一月中、太田町長、上原大沼二委員は運動のために上京、例によつて小泉邸を訪ふたが主人不在。夜に入りて電話あり、翌日再訪した。主人曰く昨日八田建設局長が某々獎學資金募集の用件にて來邸した。それは併し表面の用件であつて實は内報を齎したことが本旨であつたやうだ。内報とは伊豆鐵道のことだが、下田までとなると多額の資金を要するので採擇が容易でない。誰が見ても無理からぬのは伊東までの一部であるから、取あへず衆論を纏め易いこの一部だけを採擇することに決した。お氣の毒ではあるがその先きは尙ほ暫く忍んで貰いたいといふ話であつ

た。まづかうして憲政會時代に頭を出して貰へれば、次に其延長を計つてもあれは小泉の我儘だといふ人もなからう、君等も當分はこれで忍ぶが可い。但し局長の話は内報といふ處だから、今すぐに役所へ御禮に出ることは控へてくれと。三委員は幾たびが頭を下げてお蔭様を繰返した。

主人また曰くこの形勢は略々判つてゐたから兩三日前わざ／＼神田に黒田代議士を訪ねて、數日間滞在して消息を待つように話して置いた。いま君等に告げた内報の如きを電話では善くないから、黒田君を訪ねて口づから傳へてくれ、なほ一度は是非麻布へも御越しを願ふと云つてくれと。委員等は辭して黒田氏を今城旅館を訪ねたが、昨日歸郷されましたとのこと。三委員は感ふ所もあつてその通りには口憚り、黒田氏の出先不明だと麻布に電話したところ、小泉氏電話口には現はれ、俺に約束があつて滯京してゐることは確實だ、あの謹直な人の行先はさう面倒でもあるまいから、どこを探しても傳言を完うせよと、例の一徹氣質を爆發されたのには、聊か閉口したものだ。

併し安心は禁物なりとして有志者は絶え間なく鐵道省に出頭してゐた。越えて十二月十八日、第三回鐵道會議に於いて附議されたるもの繰上げ十八線、新規十五線、この新規建設の中に堂々熱海伊東間の名が載せられた。伊豆循環全線の二割に満たざる延長であつたとはいへ、待望二十

年の苦心は茲に全く酬いられたので、當町の歡喜は譬ふるものなく、賀茂郡の諸有志もまた歡を分つてくれた。

鐵道會議決定の後、豫算は第五十二議會の協賛を完ふし、翌昭和二年度に至り直に測量に着手された。

第十九節 伊東下田間の追加

昭和二年四月、田中義一男は若槻氏に代つて内閣に首班となり、小川平吉氏鐵相に任じ、既に次官に昇進してゐた八田嘉明氏はそのままこの内閣に留任した。

新聞紙は小川新鐵相に鐵道建設の大計劃あることを報じ、十一月に入ると省議決定の新線や追加線などが大々的に臆測されて來た。その中に伊豆線は熱海伊東間を下田まで延長するといふ報導もあつたので、町長は鐵相その他に對して感謝電報を呈したところ、十一月十五日「デンミタシンセンノケンハマダキマリヲラヌホンテツドウジカン」といふ返電を受信した。「ホン」とは不明であるが多分八田次官の發信かと解せられ、新聞報の豫斷に異せられたことを一度は悔いたが、併しやがて噂通りに事が運んだ。

十二月に入り第四回鐵道會議に附議せられたるもの、新規二十六線、既定工事に區間を追加す

るもの六線、この六線中に伊東下田間の追加が載せられた譯であつて、今度は賀茂郡の側を歡喜の裡に浸らしめた。

小川鐵相は伊豆視察を志され、三年一月六日東京發、修善寺一泊、七八兩日は賀茂郡三濱村小泉邸の客となり、九日下田稻取伊東を経て熱海町の親戚樋口修次氏の旅館に泊された。隨員は工事課長橋本敬之、熱建所長池原英治氏等十名に上つた。既に下田延長決定を見てゐたので、賀茂郡に於ける沿道の歡迎ぶりは異常であつた。復路稻取以北に車馬道なきため、同地より發動機船を仕立て波を蹴つて日蓮崎を過ぎると、伊東から歡迎船二隻滿船節をなし來り實に壯觀であつた。やがて玖須美海岸に投錨するや、長身長髯モーニングの一紳士突如として岸に現はれ、天を仰ぎ地に俯して一喝また一喝、阿吽の叫を繰返すこと三回、この異様の紳士こそは例の本田仙太郎氏であつた。當町に於いては小學校講堂を會場として歡迎の誠意を表したが、當時沿道未曾有の歡迎ぶりは、蓋し衆庶の喜悅が自然に發露したものであつた。

然るに第五十四議會は一月二十一日不幸解散されたので、小川鐵相の大計劃も來るべき時節まで延引するの外なきに至つた。同年十二月第五回鐵道會議が開かれて前回の決議を更に増大し、新規三十一線、追加五線（この中に伊東下田間を含む）といふ大規模となつた。之は四年度以降十三

年度に至る十ヶ年完成、總額六億三千萬圓に達する未曾有の大豫算であつたが、第五十七議會は之に協賛を與へた。これに依つて伊豆鐵道は下田延長と確定したのである。

第二十節 伊豆線の頓挫

昭和四年七月濱口雄幸氏首相に、江木翼氏鐵相に任じた。同内閣の政策として外は金輪解禁を決定、内は公私經濟緊縮を厲行。新規事業打切、繼續事業繰延等は當然の成行とせられ、鐵道建設の上にも大なる頓挫を招くに至り、例年々末には鐵道會議が開かれたものだが、五年及六年には無論見送られるの外なかつた。

伊豆線は先きに昭和二年度から着手され、次いで伊東下田間の追加を見たものゝ、こゝに割振られたる工事費は繰延政策のため極めて少額となり、僅に一部の測量と一部の用地買収を行ひ得たゞけで、前途誠に暗澹たる想をさせられた。偶々五年九月二十八日江木鐵相は伊豆視察の途次、當町を過ぎり、迎送した沿道町村長の陳情に耳を傾けられて、將來財政に餘裕を發見するの曉、必ず地方民衆の熱誠に應へたいと語られたので、僅に一縷の望を繋いでゐた。

第二十一節 伊豆線の復活

六年十二月、若槻男に代つて犬養毅氏内閣を組織し、床次竹二郎氏鐵相に任ぜらる。同内閣は

先づ金輪再禁止を斷行し、萎靡したる農工商救済のため大土木事業を起すべく宣明した。そこで一時沈黙し切つてゐた地方人がワンサと新鐵相に陳情に押かけ、伊豆方面も其例に洩れなかつた。この間秘書官春名成章氏及代議士倉元要一氏が常に吾人のために斡旋仲介の勞を執られた。

第六回鐵道會議は久方ぶりに十二月二十二日開かれたが、鐵相就任日淺くして新規計畫の違なく、僅に二民設鐵道營業免許の件を議決したゞけであり、會議員からは萎靡したる工事計劃の建直しを取急ぐやう、警告希望する所があつた。

七年四月下旬、當町の一團は鐵道省に於いて計畫課長池原英治氏から、伊豆線工事繰上げの省議がその日午前中決定されたことを内報されて歡喜した。當日床次鐵相在廳中であつたから、春名秘書官の紹介によつて面謁し、感謝の意を表した處、鐵相曰くホウ復活が決定したか、一行曰く本日午前中御決定下されたと承りました。鐵相曰く僕は小泉君に敬意を表するため伊豆線の心配をするやうに命じてはおいたが、復活したとは結構であると、恰も第三者の所爲でゞもあるやうに、省議決定を介意する所がなかつたから、一行は其茫漠たる無限味に魅了された。

願れば明治大正の交、床次氏原内相の下に地方局長たり、一日河島北海道長官は重要案件の停頓に關し、大に争はんとして局長室に先着して待つ處へ、入り來つた床次氏は一揖して座に着き、

堆高き書類を繰つてポン／＼押印し、一として閱讀せぬ有様であつた。河島氏曰く盲判とは亂暴ではないか、答へて曰く一々讀んでゐたら日も惟れ足らぬだらうと。河島氏呆れて二の句も吐けず、停頓の責のこの人に非ざるを悟つたといふ逸話が想ひ出された。

一行は秘書官室に戻つたが、深澤豊太郎代議士も居合はせて、同じ省議で富士身延鐵道買收のことも決せられたるを報ぜられた。床次鐵相は諸計畫を取纏めて五月中に第七回鐵道會議招集の意ありたるところ、突如五月十五日の凶變に逢ひ、犬養首相薨去に伴ふ内閣の瓦解を來たし、素志を果すに至らなかつた。併しながら伊豆線の工事費は七年度の實行豫算經理の中から床次鐵相の英斷の下に多少の増額を見たのであつた。

第二十二節 下田延長中止を惜しむ

七年五月二十六日齋藤實大將首相に、三土忠造氏鐵相に任せられた。八月に至り第七回鐵道會議に諮詢されたものゝ中、完成年度を繰上げたる鐵道十四線、この中、熱海下田間の繰上げを包含されたのだが、主として熱海伊東間の工事を促進する趣旨なることは、新鐵相が親しく當町代表者に説示された所である。新鐵相の計畫は前床次鐵相のそれと相違したる所も多く、富士身延線買收の如きは遂に葬られたが、伊豆線に關して促進の意圖を同ふせられたる事は幸運であつた。

この鐵道會議議決の計畫は同月二十三日召集されたる第六十三臨時議會の協賛を完ふした。

同年十二月三十一日鐵道の第八回鐵道會議に諮詢したる案件中、新規は僅に四線、區間延長も僅に二線に止まり、その他は既定計畫大整理の意味を以て繰上、繰延、削減等が四十一線に上り、鐵相は斯やうに緊縮主義なるかと驚いて、世論喧囂たるものあり、殊に伊東下田間が削除の否運に逢着したのは大なる恨事でもあつた。明けて八年一月初春、當町避寒中なりし山本悌二郎前農相の如きも、鐵相の政策に對して不平滿々、町有志が年賀に伺候したる際、伊豆人は宜しく大旗を立て、復活運動をするがよい、今度は僕が先頭に立つてやらうとまで示唆される所もあつたが、熱海伊東間に異變なくして既に我事成れりと小康に甘んじてゐた折柄、當町としては進んで活動を再現する形勢を馴致し得なかつた。もとく田方賀茂二郡提携し來りたる経緯に顧みれば、南部の諸有志に對しては今なほ惻隱の情禁じ難きも、切に時運の再來を期せられんことを希ふものである。

熱海伊東間の工事は着々として進捗し十年三月三十日中間網代驛の開業を見たが、爾來宇佐美の魔のトンネルといふ難所に逢着し、伊東驛開業は多少の遅延を餘儀なくせられたとはいへ、技術者の苦心は遂に酬いられ、有らゆる難關を突破して、今日豫期の通り全線の貫通を完ふし、慶

祝之に加ふるものがない。

第二十三節 感謝

鐵道運動の各時期に於ける斷面觀は前節を以て終結とする。その後昭和七年度に再着手されたる伊東線の工事、技術者の勞苦、殊に宇佐美の魔のトンネルに於ける奮闘など特筆大書すべきであるが、いづれ鐵道省當局者から報告冊子を頒布されるであらうと信じ、こゝには記述を省く。而して顧みれば過去十數歳に亘り、地方有志が如何に當局を煩はしたか、實に恐懼するのみである。そして體得したことは鐵道省吏員各位の秀でたる特色として、平民的で開放的で、いつも飾りなき應對を以て臨まれた事實である。之は他の官廳に見るべからざる獨特の温情であつたことを斷言して憚らぬ。だから事の成否に係らず陳情者は何時も心地よく引下つた事例である。永い間お世話にあづかつたものゝ、この冊子中にその芳名の悉くを掲げなかつたのは、記憶の粗漏を慮れたり、憚る點もあつたからである。所詮は各位から寄せて下された好意の蓄積が終に今日伊東線の大成を見たことには斷じて誤りが無い。今はたゞ歴代鐵相の芳名のみを次に列記する。

(氏名の上は時の内閣名、下は就職の時)

高原 元 田 肇氏 大正 九、五、一五

高橋 元 田 肇氏 大正 九、五、一五

感謝

加藤友	大木	遠吉	伯	一一、六、一二
山本	山之内	一次子		一二、九、二
清浦	小松謙次	郎氏		一三、一、七
加藤高	仙石	貢氏		一三、六、一一
若槻	井上匡四	郎子		一五、六、一
田中	小川平	吉氏	昭和	二、四、二〇
濱口	江木	翼氏		四、七、二
若槻	原脩次	郎氏		六、九、一
犬養	床次竹二	郎氏		六、一二、一三
齋藤	三土忠	造氏		七、五、二六
岡田	内田信也	氏		九、七、八
廣田	前田米藏	氏		一一、三、九
林	伍堂卓雄	氏		一一、二、二(兼任)
近衛	中島知久	平氏		一二、六、四(今日に至る)

伊東線の工事は池原氏の手によつて着手せられ、爾來歴代の熱海建設事務所長から好意を受けてゐる次第である。併し第十二節森恪代議士指摘の如く、熱海線改良工事こそは伊豆線の建設に可能性を附與した重大な關係あることに鑑み、こゝに初代以後全所長の芳名を留めよう。

富田保一	郎氏	大正	四、六、二三(就任の時、以下同じ)
青木	勇氏		一〇、六、七
中村謙	一男		一二、三、六
楠田九郎	氏		一二、一〇、一二
池原英治	氏	昭和	二、八、二九
川口愛太	郎氏		四、七、二七
竹股一	郎氏		六、七、四
平山復二	郎氏		六、一二、五
高井信一	氏		九、八、四
星野茂樹	氏		一〇、七、二〇(今日に至る)

次に田方賀茂兩郡下に於ける多數運動者の氏名は、一々各節に記載するの煩を避けたのである

感謝

が、現に健全に渡らせられる諸君は、伊東驛から待望のレールを駛走される快感を以て、御努力の報酬と見て頂きたい。たゞ過去に於いて縦横奔走されたのに係らず、不幸にもいま幽冥處を異にして、伊東驛の汽笛を聞き得られぬ英靈に對しては、限りなき悲哀を催す次第である。

官民を通じて、伊東鐵道の功勞者と仰ぐべき諸英靈の芳名を左に列記して虔んでその冥福を祈ることとする。

鐵道院總裁 後藤新平伯

鐵道大臣 元田肇氏、大木遠吉子、床次竹二郎氏。

貴族院議員 北里柴三郎男、伊東祐弘子、江原素六氏。

衆議院議員 小泉策太郎氏、石井研二氏、岩崎勳氏、野田卯太郎氏、降旗元太郎氏、森恪氏

鐵道省吏員 石丸重美氏、太田圓三氏、池原英治氏、福富正男氏。

地方有志者 鈴木藤左衛門氏、中村長五郎氏(先代)、菊間鶴藏氏(先代)、大沼廣吉氏(先代)、

佐藤吉兵衛氏(先代)、齋藤市三郎氏(先代)、坂田六兵衛氏、鈴木徳太郎氏、芹澤益

吉氏(以上伊東町)、山下久二氏(上大見村)、平井正之助氏(細代町)、小林孝氏(稻取

町)、稻葉孝氏(稻生澤村)、車谷彦一郎氏(下田町)。

以上の諸英靈に對して茲に重ねて甚深の敬意を表す。

第五章 結語及追録

宿年の待望満たされて伊東鐵道一貫竣成し、東伊豆に新しい黎明が來た。日本ツーリストビューローは豫ねて南薩摩を伊太利のナポリ、東伊豆を同國のリヴィエラに譬へて、外客に推奨してゐるが、ゼノヴァ東南方五六里間リヴィエラと概括總稱される海岸一帯は、橄欖とオレンヂが森のやうに繁茂し、溫泉あり別荘あつて百年來名を唄はれ、その南國情緒を慕つて避寒し來るドイツ、ロシア、ポーランド等の富豪の數は莫大であるといふことだ。さて日本リヴィエラとして東伊豆の將來果して如何。伊東鐵道こそはその繁昌を約束してくれるといふものだ。昨年來當町には名譽ある白衣の勇士が多數來つて豫後の回復に効果を收められ、之を緣故として厚生省にては近く鎌田區に傷兵保護院を建造される筈である。今や内外の人士を誘致する交通は具備するに至つたが、當町として如何なる新對策を以て之に應ずべきやは、未來に課せられたる大懸案である。

手の舞ひ足の踏む所を知らずといふ故言は、思ふに伊東驛開業を見た當町民の歡喜を形容するために、豫め用意された辭句であつたらう。當町は感謝と榮光とを具現せんがために特に全通紀

念式を舉行することに決し、その行事の一として稻葉町長は交通史の編纂を志したのである。その委員等は十一月十日以來、事に従つたのであるが、すべて志と違ひ日子は足らず、資料は乏しくて策の施しようがない。依つて趣向を變へて或事件の場合の小話を綴ることとした。これまた前賢故老多くは既に去つて討ぬるに人なく、僅にこゝに誌し得たものすら、多くはこれ當町住民に何等か想出の種子を呈する限度を出でず、況んや遠來の珍客には何の一顧の價値あらうぞと、恐懼するのみである。

なほ熱海建設事務所、東京灣汽船會社及駿豆鐵道會社に對しては御回答の勞を謝し、建設局計畫課小森芳昌氏に對しては幾多煩瑣なる御調査の勞を謝し、東京日々新聞社寫眞部に對しては名士の寫眞多數を貸付されたる御好意を謝するものである。序ながら三土忠造、池田嘉六、黒田重兵衛、故北里柴三郎男、故伊東祐弘子、故岩崎勳、種田虎雄等諸賢の寫眞が急場の間に合はぬことは憾みであつた。そして切迫せる小日子の間に潔く印刷を引受けられた三協印刷株式會社各位の御勞苦に對しては、特に多とする所である。(昭和十三年十二月四日脱稿)

追録

(原稿締切後、氣付きたるもの)

一、當地もと葛見之庄または伊東之郷と呼ばれ、中に湯川、松原、岡、鎌田、玖須美(和田及竹之内を併せたるもの)、新井の六村が置かれたが、明治二十三年(四十八年前)自治制の發布と共に伊東村として統一され、後明治三十九年(三十二年)一月一日伊東町となつた。いま町制施行以來歴代町長氏名を、事の序に左に列記する。氏名下は就職の時である。

- | | |
|--------------|----------------------|
| 大原 坦氏 | 明治三九、一、一(村長以來繼續) |
| 鈴木 藤左衛門氏(故人) | 大正 二、三、一五 |
| 太田 賢治郎氏 | 大正一五、三、一七(初め助役として就任) |
| 萩原 虎雄氏 | 昭和 三、三、一五(縣派遣) |
| 上原 重平氏 | 同 三、九、三 |
| 鈴木 徳太郎氏(故人) | 同 五、九、八 |
| 上原 重平氏 | 同 八、一一、二〇 |

稻葉幾太郎氏 同 一三、八、二九(現在に至る)

二、昭和十三年十二月十五日、一貫開通の輝かしい祝典を擧げる國鐵伊東線は昭和七年三月卅日熱建部隊が着工以來足かけ七年間、而して昭和三年測量開始以來の工費總額は實に六百廿萬圓(一キロ當り卅八萬七千圓)の巨額である。來の宮、伊東間わづか十六キロでかゝる莫大な工費は國鐵でも珍らしい多年の難工をしのぶに足る數字であるが、全線中トンネルは、「第二の丹那」宇佐美隧道(二千九百廿メートル)の工費二百萬圓(一メートル當り六百七十圓)をはじめ、不動隧道(二千七百九十五メートル)、水口隧道(九百六十三メートル)、小山隧道(百八十八メートル)、多賀隧道(百廿三メートル)、丸山隧道(八十メートル)の六本あり、これ等のトンネルの工費だけでも三百五十餘萬圓といはれてゐる。

三、尙ほ筆を擱くに際し、當町宣傳委員部撰定に係る唱歌を籍りて、名勝風光の紹介に代へる。其歌詞即ち左に

伊東交通唱歌

一、大東京を立ちいで、心もかろく汽車の旅

武相の平野颯爽と 走ればやがて伊豆の海

二、熱海の驛を分岐して 近く來の宮伏し拜み

みんなみすれば伊東線 日本リヴィエラ見にゆかん

三、蜜柑だいたい多賀の里 だんだん昌繪に似たり

網代の浦のかたをなみ 舞ふや生簀のむら千鳥

四、技術の精華トンネルの 魔熱を攻めて道しづか

宇佐美城址の松老いて 健康學園ほどちかし

五、こゝは湯どころ伊東町 東にみなと西に山

いでゆの匂ひ人の群 なかに白衣の勇士あり

六、波はざぶらん手石島 ポートは近く帆は遠し

黒瀬八丈渡り來し 船にや翳す大漁ぼた

七、旭日夕陽の瓶山に 誰かは獲つる金の壺

葛見の郷社千年の 樟の巨木ぞ芳ばしき

八、唐入川にアダムスの 造りし船は跡絶ゆれ

追 録

木蔭をぐらき淵の邊に

稚兒泣く聲やなほ残る

九、頼朝公を逃がしやり

九郎祐清義にかたく

聖日蓮しやうを迎へては

地頭朝高信あつし

十、その名もゆかし小室富士

ゴルフの球は雲に入り

観光ホテルとつ國の

ワルツの調べさんざめく

十一、遠笠矢筈一碧湖

太古のさまの山と水

埼玉三里赤澤の

椎の木三本矢のうらみ

十二、豪華日本ひがし伊豆

レールは運ぶ新使命

いま甦へる御民われ

伸びゆく御代を壽がん

以上

昭和十三年十二月十日 刷
昭和十三年十二月十五日 發行

【非賣品】

静岡縣田方郡伊東町

伊東町 役場内

編輯兼
發行人

伊東線全通記念式委員部

東京市京橋區銀座西二丁目三番地

印刷者

高 橋

郁

伊東線全通記念式委員部編

終